

第3章 金史良文学と植民地という制度

第1節 金史良文学と創氏改名

1 はじめに

金史良の作品には、朝鮮人の名前をめぐる問題を扱った作品がいくつもある。一九四〇年度芥川賞候補作に選ばれ、日本での作者の本格的な作品活動のきっかけになった「光の中に」では、南（なん）と南（みなみ）の間に揺れ動く主人公の心理の変遷過程が巧妙に描かれている。ほかにも、金史良の作品には、日本名を名のる朝鮮人が頻繁に登場している。「天馬」には、創氏改名した親日文学者の大江龍之介（金文輯）の日本名からもじった玄龍（玄の上龍之介）という主人公が出ている。また、「光冥」では、日本人の妻をもち、自分が朝鮮人であることをひたすら隠している清水を名乗る人物が登場している。さらに、金史良の日本での最後の小説である「親方コブセ」では、李山（りやま）、朴沢（ほくさわ）、馬川（まがわ）などの奇妙な名前の朝鮮人労働者たちが登場している。

金史良の日本での活動は一九三九年末から一九四二年始めまでの、わずか二年余りであるが、この短い間に、朝鮮人の名前に関してこれ程強い興味を示したのは、日本の文学だけではなく、いわば当事国である韓国文学のなかでもあまり例を見ないものである。もちろん、これには、当時朝鮮総督府によって実施された創氏改名政策が背景になっている。創氏改名政策は一九三九年十一月に制令が發布され、翌年の八月十日をもって完了している。金史良は、この政策の開始とほぼ同時期に「光の中に」を発表し、また、彼が日本で創作活動を行った期間のほとんど半分近くが、その政策の実施期間の最中であった。以下、創氏改名と金史良文学との関わりを考察してみよう。

2 創氏改名

創氏改名は一九四〇年二月十一日、皇紀二六〇〇年の紀元節をむかえて朝鮮全土でいっせいに始まった。その法的根拠になったのは、前年の一九三九年十一月十日、朝鮮総督府によって公布された制令第十九号「朝鮮民事令中改正ノ件」と制令第二十号「朝鮮人ノ氏名ニ関スル件」である（一）。制令十九号は、内地式の「氏」を朝鮮人にも適用するというもので、元来「氏」を持たない朝鮮人は、新しく内地式の「氏」を創らなければならなかった（二）。これを「創氏」という。つまり、姓名から新しく氏名に変わったのである。制令二十号は、新しく創られた

「氏」と従来の「名」について、「正當ノ事由アル場合ニ於テ」はその変更を許可するもので、その「氏」の変更を「改氏」、「名」の変更を「改名」といい、両者を合わせて一般的に創氏改名という。これらの制度は、朝鮮総督府の皇民化政策の一環として押し進められることになるが、その究極の目的は、天皇の軍隊のなかに、「金某、李某等混リタリトセバニ思ヒヲ致サバ、其利弊又自ラ明カナルモノ」といったような、朝鮮での徴兵制を敷くためであったという。(38)。すでに朝鮮では徴兵制の予備段階として、一九三八年二月には「朝鮮陸軍特別志願兵令」が、同年三月には第三次朝鮮教育令が公布されており(4)、創氏改名はこれらの延長線で行われた朝鮮統治の完結体といえるものであった。

創氏改名の実施は姓と名を変える習慣が全くなかった朝鮮の民衆に大きな波紋を投げかけることになり、名前をめぐって賛否紛々するなかで、一般民衆の不安は最高潮に達した(5)。そうした民衆の不安と反発を取り除き、積極的にこの制度を宣伝するため、朝鮮総督府はまっさきに朝鮮人の文学者を駆り出した。その第一号が金文輯であった。一九三九年十一月二六日付の『京城日報』には、「大江龍無酒之介」と創氏改名に至った彼の決意が次のように紹介されている。

この時去る二十一日午後七時四分、龍山駅頭に戦死将兵遺骨を迎へた氏は初めて接する嚴肅莊嚴さに大きい心の衝撃をうけて周囲を憚らず泣いたのだつた。そして心中決するところは、日本の鞏固的宿命である世界政治への実践道程は内鮮の同体的一元化意識にある国体的自己様相を闡明せずしてはその発見は許されぬ。この大事業のためには酒に負けてなるものか？「もう酒は死んでも呑まんぞ」かくて氏は禁酒を天地に誓約すると共にその場で改姓名したのだつた、すなはち大邸で生まれて江戸で育つて龍山駅頭で甦つた……つまり大江龍を以てうぢとし酒なき男……無酒之介を命名とした。(6)

彼は後に大江龍之介と創氏改名し、「朝鮮民族の発展的解消論序説」なるものを書くなど、いわゆる親日文学者としてのさまざまな醜態を演じているが、それらの模様を書いたのが「天馬」であり、主人公の玄龍(玄の上龍之介)という名前は彼の創氏名をもじったものである。

もう一人、早い段階で創氏改名を表明したのが、朝鮮近代文学の大御所と言われた李光洙であった。彼は『京城日報』(一九三九年十二月十二日付)に、「一家揃つて「香山」姓」を名乗ることになった「創氏の苦心」を語り、さらに翌年、総督府の朝鮮語版機関誌『毎日新報』(一九四〇年二月二十日付)には、「創氏と私」というエッセイを載せている。

朝鮮人が内地人と差別がなくなることに、何を望むことがあるか。したがって差別を除去するためにあらゆる努力することの他に、何の重大でかつ緊急なことがあるだろうか。姓名三字をなおすのも、その努力の中の一つならば、なんの未練もない。喜ぶべきことではないか。私はこのような信念で、香山という氏を創設したのである。(中略)

万一、それに反して日本式氏を創設する者が小数にすぎなかったならば、それは不幸な方の推定資料とならざるを得ないだろう。なぜならば、国家が朝鮮人を信ずるか否かが、朝鮮人自身の幸不幸に大きく関係していることは自明だからである。それ故に日本的な氏を創設することは、一種の政治運動であると私は信ずる。(7)

李光洙にとっての創氏改名は、差別から脱出するための「一種の政治運動」として方法的な意味合いが強かったと思われる。その点、金文輯とは違う意味での創氏改名であったが、その真意はともあれ、結果的に一般民衆の創氏改名に一つの役割を果たしたことは否めない。

このように、金史良が作家として日本文壇に登場する前後は、創氏改名の問題で朝鮮全国が騒然としていた時期であった。その喧騒たる時期に文学者たちはまっさきに創氏改名を表明し、総督政策に同調していくのである。金史良の文学には、そういう時代を反映した創氏改名の問題が大きな影を落としている。

3 「光の中に」と創氏改名

「光の中に」は一九三九年十月号の『文芸首都』に発表されたもので、翌年の二月芥川賞候補作として選ばれ、同年三月号の『文芸春秋』に転載された。奇しくも創氏改名と皇紀二六〇〇年紀元節が始まる四日前の二月七日に、芥川賞候補作として発表されたのである。しかし、朝鮮人の名前の問題を政策とは反対の立場で扱った「光の中に」が芥川賞の候補作となったことは、創氏改名実施を目前に控えた朝鮮の事情からすれば、あまりにも奇妙な出来事といえる。というのは、この作品の内容が創氏改名政策とは相入れないからである。以下、作品の梗概を簡単に見てみよう。

朝鮮人の南先生Ⅱ△私Ⅱは、帝大学生が中心になっている隣保事業団体のS協会に所属しながら、夜は、江東区の工場街の若者と子供に英語を教えている。△私Ⅱはそこで同僚と夜間学習に来る無邪気な子供達からは、本名の南(なん)先生ではなく、南(みなみ)先生と呼ばれている。△私Ⅱは南(みなみ)と呼ばれることを非常に気にしながらも、便宜上をそのまま受け入れている。

そのS協会の子供部には、他の日本の子供とは一風変わった山田春雄少年がいた。彼は他の子供たちの仲間に入ろうとせず、いつも一人でうろつき廻る、一見陰鬱で懐疑的に見える少年である。そんなある日、△私▽が南（みなみ）先生と呼ばれていることに憤激した朝鮮人の李青年が、△私▽のところへ抗議しにくる。そのやり取りを盗み聞きした山田少年は、「そうれ、先生は朝鮮人だぞう」「やい朝鮮人」とはやし立て△私▽を困惑させる。そして、後日、山田少年の父親の半兵衛が妻の顔を刃物で切りつける事件が起こる。その事件で△私▽は山田少年の母親が朝鮮人であることを知るが、山田少年は「僕は朝鮮人でないよ、僕は、朝鮮人でないんだようー、なあ先生」と必死に否定する。△私▽は山田少年の内面で「父なるもの」に対する無条件的な献身と「母なるもの」への盲目的な拒否が相克し、大きく屈折していることを発見する。それが暴力的な父親を肯定し、愛情と親しみを感じながらも、母の存在を否定することに結びついていたのである。山田の母貞順は、虐待を受けながらも、夫と息子のために自分が朝鮮人であることをひたすら隠そうとする。息子を完全な日本人として育てるがためである。しかし、△私▽と李青年をはじめ、廻りの親切な朝鮮人たちに触発された彼女は、「朝鮮の女」としての自己認識に到達する。一方、山田少年も今まで抑制してきた母への愛情を素直に表現することになる。母への愛情を通して、「母なるもの」である「朝鮮的なるもの」への認識も深めていくのである。これをきっかけに△私▽も南（みなみ）から南（なん）へ回帰していくのである。

以上の内容からわかるように、この作品は△私▽が南（みなみ）から南（なん）へ回帰する筋の展開で、創氏改名とは明確に対立している。とすれば、創氏改名を批判的に捉えたこの作品が、創氏改名と皇紀二六〇〇年の紀元節を四日前にして、芥川賞の候補作として選ばれた背景には何があっただろうか。当時の芥川賞選考委員達の評のおもなものをみてみよう（8）。

滝井孝作

金史良氏の「光の中に」は、朝鮮の人の民族神経と云ふものが主題になつてゐた。この主題は、これまで誰もこのようにハツキリとは描いてゐないやうで、今日の時勢に即して大きい主題だと思つた。

久米正雄

是に比べると、候補第二席作品「光の中に」は、実はもつて私の肌合に近く、親しみを感じ、且つ又内鮮人問題を捉へて、其示唆は寧ろ国家的重大性を持つ点で、尤に授賞に値するものと思われ、云々

川端康成

金史良氏はいいことを書いてくれた。民族の感情の大きい問題に触れて、こ

の作家の成長は大いに望ましい。文章もよい。しかし、主題が先立って、人物が註文通りに動き、幾分不満であつた。

佐藤春夫

金史良君の私小説のうちに民族の悲痛な運命を存分に織り込んで私小説を一種の社会小説にまでした手柄と稚拙ながらもいい味のある筆致をもなかなか捨て難いのが感じた。

選考委員の共通した意見は、時局との関わりの中かでこの作品を評価していることである。「今日の時勢に即した大きい主題」で、「国家的重大性を持つ点で、尤に授賞に値する」という評がそれである。日中戦争が泥沼化し、太平洋戦争を間近にひかえ、朝鮮の重要性が新たに認識されたのである。ほとんど無視されてきた朝鮮と朝鮮文学への関心が盛んになり、雑誌などではさまざまな朝鮮特集が組まれたのもこの時期である(26)。「光の中に」が芥川賞の候補作になった背景には、このような時局的な要素が大きく働いていたといえる。

しかし、前述したように、この作品の内容は総督府の創氏改名政策とは相入れないものである。矛盾と言えば矛盾である。それでは何故これが可能になったのだろうか。その背景には日本と朝鮮におけるの時局認識に対するズレがある。朝鮮で実施された創氏改名については、日本の新聞紙上にはあまり紹介されておらず、現に芥川賞選考委員たちもそれについてはあまり知らなかったように思われる。創氏改名への認識がなかったとすれば、作品の内容は全然違ふかたちで解釈できるからである。つまり、△私Vという朝鮮人と朝鮮混血児の日本人の山田少年によって浮き彫りにされる差別の問題を扱い、両者ともに最終的にはそれを受けこえ、真の自己認識と相互理解に達する時局的な作品としても読めるからである。川端康成が「主題が先立って、人物が註文通りに動き、幾分不満」と言ったのは、それを指摘してのことではないだろう。

また、混血児の山田少年が自分のなかにいる「母なるもの」としての「朝鮮的なもの」を認めていく過程は、当時盛んにいわれた「内鮮融合」、もしくは「内鮮一体」の論理構造とも無関係なものではない。朝鮮人への差別こそ「内鮮一体」の大きな障害物であるとの認識が一般的にあり、内鮮結婚が「内鮮一体」の具現として賞賛された時代である。内鮮結婚によって生まれた山田少年が差別を乗り越えて「母なるもの」としての「朝鮮的なもの」を認めていくことは、「内鮮一体」を支える論理としても解釈できる。選考委員もおおむねこういう解釈によって評価したと思われる。戦後、在日朝鮮人文学者や日本の進歩的な学者によって、この作品が作者の中国抗日地区への脱出を予感させるものとして高く評価されたにも関わらず、北朝鮮と韓国の一部で、依然として厳しい視線が残っている

のは、選考委員と同じ解釈が可能だったからである。

北朝鮮の文学評論家ジャン・ヒョンジュンは、「作家金史良とその文学」のなかで、「光の中に」の肯定的な面を一応評価しながらも、次のような厳しい批判を投げかけている(10)。

作家はこの作品の中で、日本人の朝鮮人蔑視思想を批判しているにも拘らず、我が民族の運命に関する問題を正しく提起することができなかった。さらに、日本の「内鮮一体」政策に正面きって挑戦することはできなかった。(中略)

この作品の限界は混血児である春夫少年の問題を作品の基本的な問題として設定しているからである。このような問題設定としては、民族の悲痛な運命がうまく捉えられない。何故かという点、悲痛な朝鮮民族の運命は日帝によって搾取されている朝鮮人の問題であって、春夫少年のような混血児に関する問題ではないからである。

一方、韓国のイ・サンキョンは「暗黒期を照らす民族解放の文学」のなかで、北朝鮮の見解をそのままそっくり写したかたちで論を進めている(11)。

しかし、今、私達はこの作品を読みながら、そんなに切実な感動を受けることはない。それは「光の中に」が日帝植民地下の朝鮮民族問題の核心から離れているからである。悲痛な朝鮮民族の運命は日帝に抑圧され、搾取されている朝鮮人の問題であって、春夫少年のような混血児の問題ではないからである。

両者共に「内鮮一体」の問題としてこの作品を捉え、批判していることがわかる。

以上からみるように、「光の中に」に対する評価は、当時の全体的な時局ばかりにこだわって、具体的な事件と政策についてはあまり注目しなかった感がある。つまり、「内鮮問題」にばかりに気を取られて、「創氏改名」という具体的な政策についての検討がなかったのである。そのため、実質は創氏改名に反対する内容のこの作品が「内鮮問題」を一般的に扱った作品として評価され、創氏改名実施の四日前に芥川賞候補作として選ばれるという皮肉な結果に至ったのである。

しかし、「光の中に」を創氏改名と関連させて論じるとき、そこには時間的なズレが生じてくる。というのは、「光の中に」の初出が一九三九年十月の『文芸首都』で、創氏改名の制令が正式に発表されたのは、同年十一月十日になっているからである。しかしながら、結論を先に言う点、この政策が発令されたのは十一月であったが、その動きはもっと早い段階から進んでいた。年譜によると、金

史良は一九三九年四月五日から朝鮮日報の学芸記者として京城に滞在しており、新聞記者という立場上、創氏改名実施に関する情報を一早く入手できたと考えられる。しかし、新聞社の記者でなくても創氏改名の動きに気付くのはそんなに難しいことではない。創氏改名の発令以前に、内地式改姓を唱える論文が総督府の機関雑誌などに掲載されはじめていたからである。たとえば、同年七月の「内地一体化の親族相統法確立」(12)、同年八月の「内鮮一体と内地式改姓」(13)、同年十月の「内鮮一体の倫理的意義」(14)などの論文がそれである。とくに「内地一体化の親族法確立」には、「半島の熾烈なる、要望をも考慮」して、朝鮮民事令中親族相統に関する大改革が、すでに「拓務省を経て法制局において審議中」であるとし、その内容は、「内地同様家名の称号たる「氏」を創設し、さらに「婿養子縁組」を認め」るものであることを明らかにしている。さらに、「内鮮一致と内地式改姓」では、「半島が名実共に帝国に包容せられた今日、其の新同胞に日本式の姓を許すといふことは何等差支ないことで、否寧ろ之は当然のこと」といって、その具体的な運用の面まで提示されている。

若し強ひて漢字音読みの地名を採ることとせば、折角姓の上で日本化しやうとする目的が達せられないのみならず、之では何時までも自分は朝鮮人であるといふことを表示するやうなもので、改姓の甲斐がないのみならず、内鮮一体の具現にはならない。故に思ひ切つて内地人が用ひつつある姓に依らしめるのが良いと思ふ。

さらに、同論文は、その例外として元山(モトヤマ)、水原(ミズハラ)のように、日本式読みが可能なのはそのまま使ってもよいという。また、「其の祖先を日本の高貴の人人に藉り、系統を偽る弊」を犯さぬよう、「新撰姓氏録」から朝鮮人姓の実例まで出している。ほかにもこの論文は、いたるところに創氏改名を前提にした書き方で、細かい指摘までなされていることから、すでにこの時点で創氏改名政策の根幹が出来上がっていたように思わせる。朝鮮日報の記者であった金史良も、当然こういう情報を早い段階から事前に把握し、それをいち早く「光の中に」の中で批判的に扱ったであろう。それらの模様は「光の中に」に関する作家の言葉からも推測できるかと思われる。

「光の中に」が芥川賞候補作に選ばれた後、金史良は「母への手紙」という形式で、授賞についての感想を述べている(15)。

私の小説の広告見出しの下には、佐藤春夫といふ作家の批評として「私小説のうち民族の悲痛な運命を存分に織り込んだ作品」といふ風な文字が、枠付き

ではいつてゐたのです。(中略)

私はもともと自分の作品でありながら、「光の中に」にはどうしてもすっきり出来ないものがありました。嘘だ、まだまだ自分は嘘を云つてゐるんだと、書いてゐる時でさへ私は自分に云つたのです。

「どうしてもすっきり出来ないもの」としての自分自身に「嘘」をつくというよ
うな認識は何処からくるものであろうか。また、彼は「これからはもつとほん
うのことを書かねばならないぞと自分に何度も云ひました」と自分自身に言い聞
かせている。とすると、「光の中に」では「ほんとうのこと」をそのまま書けな
かったということになるだろう。

この疑問に関しては、安宇植はその評伝のなかで、金史良の「民族的良心」や
「彼に負わされた民族的責任への自覚の高まり」がこの種の「不満をつよく抱か
しめ」と指摘しているが(19)、これには中国抗日地区へ脱出したという作家の
政治的な結果による類推からであるような印象が強い。たとえば、「民族的な責任」
という論理が可能だとしても、すでに「私小説のうちに民族の悲痛な運命を存分
に織り込んだ作品」という賛辞があることから、充分責任を果たしているとは考
えられないだろうか。それでは、何故金史良は「すっきり出来なく」、「嘘」を
言っているように思つたのだろうか。一九四〇年十一月に刊行された小説集「光
の中に」の跋文には、次のようにある(17)。

丁度大学を卒業した春、京城に滞在しながら、下宿の小さな温突部屋で妙には
りつめた興奮の中で一気に書き上げた。止むに止まれぬ気持に追はれるやうに
書いたものの一つであるが、「天馬」も又私は書いたといふより、寧ろ書か
せられたやうな気がする。

「はりつめた興奮の中で」「止むに止まれぬ気持」で「一気に書き上げた」とい
うと、なにか大きな刺激があったことを推測させる。また、同じ「止むに止まれ
ぬ気持」で「書かせられた」のが「天馬」であるという。「天馬」に関する次の
作者の記述からもそれが確認できる(18)。

拙作「天馬」の中において、私は否定的な面にのみ執拗に喰ひ下がつた傾きは
あるが、それでも已むに已まれぬ気持で、かくも憎むべき主人公をよくよく横
行させる社会を呪ひ、且つさういふ人物をみて朝鮮人全般を兎や角云つて貰つ
ては困るということをも暗示したかつたが……(後略)

二つの作品のいずれを書く際にも、作者は「止むに止まれぬ気持」で、なかば「興奮」の状態で書いている。「天馬」はなりふり構わぬ親日文学者の実態を描いたもので、主人公の親日文学者玄龍（玄の上龍之介）は、実際のモデルである金文輯氏の日本名、大江龍之介をもじったものである。とすれば、ともに「止むに止まれぬ気持」で書かれた「光の中に」と「天馬」とは、日本名を名乗る朝鮮人を主人公としている点で共通していることになる。玄龍（玄の上龍之介）にしろ、南（みなみ）にしろ、創氏改名を前提にした名前である。とすれば、金史良がいう「止むに止まれぬ気持」というのは、創氏改名と大きく関わっているのではなからうか。創氏改名への憤りが彼をして「はりつめた興奮」のなかで、「一気に書き上げ」させた一つの要因になったとは思われまいだろうか。しかし、作品のなかで創氏改名をそのまま批判的に扱うのは、時局上とでもできないことである。時局に触れないかたちで、それを間接的に表現するしかなかったであろう。それが、「ほんとうのこと」が書けず、「嘘」をついているような認識に到らせたようには考えられないだろうか。

先述したように、「光の中に」は主人公の南先生が南（みなみ）から南（なん）に回帰していく話で、作品中には名前をめぐってのさまざまな想念が述べられている。まず、△私▽の名前が南（みなみ）と呼ばれることについては、

さう云へば私はこの協会の中では、いつの間にか南先生で通つてゐた。私の苗字は御存じのやうに南と読むべきであるが、いろいろな理由で日本名風と呼ばれてゐた。私の同僚たちが先づさういふ風に私を呼んでくれた。私ははじめはそんな呼び方が非常に気にかかった。だが後から私はやはりかういふ無邪気な子供たちと遊ぶためには、却つてその方がいいかも知れないと考へた。それ故に私は偽善をはる訳でもなく又卑屈である所以でもないと自分に何度も云ひ聞かせて来た。そして云ふまでもなくこの子供部の中に朝鮮の子供でもゐたらば、私は強ひてでも自分を南と呼ぶやうに主張したであらうと自ら弁明もしてゐた。

こういう心理は、一九四〇年東京羽田書店から刊行された金聖民の「緑旗連盟」という奇妙な作品からも窺える(二〇)。そこでの女主人公南明熙は、東京で留学しながら、普段は南（なん）を名乗っているが、必要と便宜によって南（みなみ）を名乗る。そして、銀座の洋品店の店員に就職する際、南（みなみ）として名乗ることを進められ、その言葉の持つ響きに感動して、以降南（みなみ）を名乗ることになる。これと同じように、△私▽は南（みなみ）として呼ばれていることについて、くどいくらいの弁明を列べながら、結局はそれをそのまま受け入れて

いる。その意識の根底には、できれば自分が朝鮮人であることを隠したいという、偽善と卑屈の心理が働いていることも事実であろう。そんなある日、△私▽は朝鮮人の李青年の猛抗議により、自分のなかにいる偽善や卑屈の心理と直面することになる。

「勿論私は朝鮮人です」といふ自分の答は心なしかいささかふるへを帯びてゐた。恐らく彼に対しては少なくとも苗字のことが気にかかつてゐたのである。或は平気な気持でゐられなかつたのも、その点自分の身の中に卑屈なものをつけてゐた証拠に違ひなかつた。

李青年は昼間は自動車の助手をしながら、夜はS協会に通う真面目な青年である。彼は△私▽にむかつて「寧ろ私のような職場の人々に苗字のことでいろいろ気拙いはずですよ」といって、「だが私はそんな必要をみとめないのです。私はひがみたくもなければ、又卑屈な真似もしたくないのです」と自分の朝鮮名を名乗ることになんの躊躇も見せない。むしろ、朝鮮名を隠すことへの強烈な反発を露にする。創氏改名に対する作者の態度がよく示された箇所といえよう。そういう李青年の態度や、後の山田少年の母親貞順が夫に刺される事件を経て、△私▽は激しい自己反問を重ねることになる。

だが私はその次の瞬間、自分が現在には南みなみと呼ばれてゐることがじーんと電鈴のやうに五官の中へ鳴り響いて来るのを感じた。それで私は驚いたやうにいつもの様々な云ひわけの理由を考へ出さうとした。だがもはや駄目だった。「偽善者奴、お前は又偽善をはらうと云ふのだな」私の傍で一つの声が聞えた。「お前も今は根気が続かなくて卑屈になつて来てゐるぢやないか。」

こういう自己反問のすえ、△私▽は初めて病院に入院している山田少年の母貞順に「・・・私、南みなみと申します」と朝鮮名をななることになる。それに刺激された貞順も、日本人の山田貞順だという今までの頑な姿勢から、「そして妾、朝鮮の女です」という自己認識に到る。そして、作品は最終的に「母なるもの」へのあらたな理解と愛情を取り戻した山田少年が、△私▽にむかつて言う。

「先生、僕は先生の名前を知つてゐるよう」

「さうか」私はてれかくしに笑つて見せた。「云つてごらん」「南みなみ先生でせう？」さう云つたかと思ふと彼は私の手に自分の脇にかかへてゐた上服を投げ附けて、嬉々としながら石段をひとり駆け下りて行くのだつた。

山田少年が「母なるもの」への愛情を回復することと、△私▽が南（みなみ）から南（なん）への自己回帰を果たすことよって、二人は最終的に「救はれ」るかたちになる。そして、作品のなかには、△私▽と山田少年という二つの観点から二重構造として、お互いに相互補完的な関係を保っている。山田少年の「母なるもの」への愛情と△私▽の南（なん）への回帰は、同類の心情に基づいているのである。しかし、そこには誤解を招きかねない微妙な違いも存在しているように思われる。というのは、山田少年の観点を強調した場合、差別問題や内鮮問題がおもな主題になり、日本人の山田少年が「母なるもの」である「朝鮮的なもの」を認めるという、内鮮一体の思想に近いかたちで解釈できる可能性があるからである。しかし、△私▽の観点を含め、創氏改名という具体的な朝鮮の時局から考察すると、作品は名前の問題が中心になり、△私▽が南（なん）という自分の本来の名前を認識するに至る自己回帰の話として解釈できる。つまり山田少年と△私▽の自己回帰は、本来の自己を取り戻すという点では同じだが、山田少年にとっては日本人の自分と朝鮮人の母とが結びついた時点で本来の自己が存在しているのに対し、△私▽にとっては日本人の名前を捨てて朝鮮人の名前を取り戻した時点でそれが存在している。すなわち山田少年の自己は日本と朝鮮の融合において存在し、△私▽の自己は日本から離反において存在しているのである。その△私▽の日本からの離反が日本名への拒否という創氏改名に対する反対のかたちで表明されたのであろう。

一九四〇年四月、「光の中に」の映画化が朝鮮映画と東宝の提携で計画されたが、ついに実現に到らなかったというが、そこにも創氏改名の問題が絡んでいるように思われる。創氏改名が実施されたばかりの時期に、折角の南（みなみ）から南（なん）へ回帰していく人物の登場は、当の朝鮮総督府にとっても非常に都合の悪いことであつたらう。

最後に、南という苗字と創氏改名について一つ付け加えて置きたい。創氏改名の実施により、朝鮮式の姓は日本式に改められることになったが、そこにはいくつかの例外的な姓があった。△私▽の姓である南や、呉、林などがそれである。「呉をクレと読み、南をミナミと読むように、読み方を変えるだけなら、別に届は要」らなかつたという(20)。すなわち△私▽の南（みなみ）という呼び名は、後の創氏改名の際、このまま日本名とすることができたのである。また、創氏改名の前後、南（みなみ）と創氏し、南三郎、南四郎、南五郎等々をなめる人物が続出したという。当時、創氏改名を立案した朝鮮総督が南次郎であり、南総督と同族の姻戚関係を装って、ことを有利に進めるためであつたらう（しかし、南太郎の名は総督に失礼にあたるため、名乗るものはなかつたという）。さらに、南

総督赴任の際には、筆者の祖先である南氏宗親会では誰よりも総督の赴任を歓迎し、門中祖先儀礼への参加と寄付を願ったという。日本の南氏は朝鮮の南氏の分派であるという根拠のない論理で、総督を暫くわかれていた同族とみなし、周りから大きな顰蹙をかったという。「光の中に」で南（みなみ）と南（なん）に揺れ動く「私」Vという人物の造形は、まさにこういう時代像を反映するものである。

4 「天馬」の創氏改名と国語

「天馬」は、一九四〇年六月『文芸春秋』に発表された後、一九四〇年十二月小山書店発行の『光の中に』、さらに一九五四年六月理論社発行の『金史良作品集』にそれぞれ収録された作品である。

年譜によると、金史良は「光の中に」の発表以降、おもに「草深し」のなかで生かされることになる江原道の火田民実地調査に精を出している。その間、「母への手紙」などのいくつかのエッセイをものになっているが、日本語小説としては「天馬」が、「光の中に」が芥川賞候補にあげられた後、最初に発表された作品」であるという(21)。

一方、「天馬」が発表された一九四〇年六月というのは、すでに考察したように、同年八月十一日までを期限とする創氏改名実施期間のさなかである。二月十一日から始まった創氏改名政策は、作家、政治家などの知識人を動員しての積極的な宣伝にも関わらず、「届出期限の半分に達した五月二十日になって、届出率はわずか七・六%」にしか達しなかったという(22)。こういう不振状況に、総督府は強制の度を強め、後半の三ヶ月で前半の十倍以上に数字を伸ばし、ほぼ八〇%まで達せしめたのである。「天馬」はこのような時代のさなかで書かれたもので、そこには、「光の中に」に引き続いて、創氏改名の影響が色濃く現れている。また、この時期は、創氏改名と併行して進められた言語政策がいよいよ表面化されつつあった。すでに前年の十月には皇国文学の実践を呼びかける朝鮮文人協会が発足されており、「天馬」発表の二ヶ月後になる八月には、朝鮮語の二大新聞である『朝鮮日報』と『東亜日報』が廃刊に至る。続いて翌年四月になると、朝鮮語の代表的な文芸雑誌『文章』『人文評論』が強制廃刊になる。「天馬」が発表されたのは、このような創氏改名と朝鮮語問題をめぐっての目まぐるしい社会情勢のなかであった。以下、その内容を簡略に紹介する。

京城新町の娼家で夜を明かした小説家玄龍は、翌日、本町の明治製菓に寄るが、その従業員からはほとんど相手にされない。彼は、日頃から朝鮮語の抹殺と日本語による創作を叫んでいる人で、昨日もここで開かれた朝鮮文人協会の会合の

時に、朝鮮語による創作の必要性を主張する評論家李明植にかみついて大きな騒ぎを起こしているのである。ロビーで新聞記事に目を通していた玄龍は、たまたま東京で親交のあった日本人小説家田中が満州の帰りに朝鮮ホテルに泊まっていることを発見し、窮地から救われる思いで田中を探して町をさまよう。その途中で以前の情婦である女性詩人文素玉と出会ってさらに恥をかくことになるが、しかし、肝心の田中の行方はなかなかつかめない。彼にはどうしても田中に会わなければならぬ理由がある。それは彼があるくだらない事件に関係してスパイの嫌疑をうけることになり、U誌の責任者である大村から頭髪を剃り、お寺で修業するように命じられ、その命令の撤回を大学の同窓である田中に依頼したいからである。しかし、いくら探しても田中は見つからず、疲れはてた彼は酒屋に入っ一人で飲んでいたところ、偶然にもそこに官立専門学校教授の角井と大村が田中をつれて現れる。そして田中を通じて頼んでみるが、誰にもまともに相手にされなくなり、さらなる滑稽を演じる。店を出てから彼はちょうど手にしていた桃の枝に跨って、「玄龍が天に上るんだ、天に上るんだ。」とわめき叫ぶ。そしてあくる日、文素玉との神社参拝の約束を破って、一人参拝の列とは反対方向に、気違いのように雨の中を喚きながらさまよい歩く。

以上、梗概を見たが、主人公の玄龍は、作品中で自ら日本名の玄の上龍之介を名乗っていることから、その創氏名が大江龍之介である金文輯をモデルにしたことがわかる。韓国の評論家金允植は金文輯論の冒頭で、「無気力な一九三六年の韓国評壇に現れた一匹の鴉」として彼を紹介し(28)、川村湊も「現在までも朝鮮近代文学の道化、無頼漢、性格破綻者、パフォーマーとして記憶」される人物としての金文輯を捉えている(29)。しかし、作品では玄龍以外にも実在人物をモデルにした登場人物が数多く見られる。玄龍にお寺行きを命令する「U誌の大村」という実力者は、『緑旗』誌と緑旗連盟の責任者である津田剛、その救い主として現れた「東京文壇の作家田中」は、満州旅行の途次に京城によった小説家田村泰次郎を連想させる。また、「官立専門学校教授の角井」は、京城帝大教授兼京城工業経営専門学校校長の辛島暁、女性詩人の文素玉は当時の男性作家の寵愛を一身に浴びた盧天命、「東京の或知名な作家尾形」は林房雄をそれぞれ連想することができる(25)。こういう登場人物とモデルの関係は、「虚構性をその命とする小説作品の中ではさほど意味を持たない」ともいえるが(26)、「天馬」での主人公玄龍の場合は、その出自と創氏名的一致、さらに人物像の生々しさから、「性格破綻に至った当時朝鮮文人の代表」(27)としては済まされない、具体性を感じさせる。しかし、なによりも、わざと創氏名を出したということは、この作品の創作時点においては、まだ創氏改名の初期段階であり、文人の創氏名も一般的でなかったことを考えると、金史良の創氏改名に対する態度の一端を窺い知る

ことができる。すでに指摘したように、金文輯は創氏改名の第一号である。彼の創氏名をそのまま作品のなかでもじるということは、氏の滑稽的な親日ぶりのなかに、この創氏名が重要な働きをしているからのように思われる。それは、「天馬」のなかで、主人公の玄龍が最終的に到達する結末からも窺える。

彼は腕を振り上げて何かを二言三言声高に叫んだ。それから突然又殺気だった断末魔の鬨牛のやうに怖ろしい勢いで駆け出し、一つ一つの家の大門を叩き廻り始めたのである。

「この内地人を救つてくれ。」

彼は息をせいせいさせながら喚くのだった。そして又他の家へ飛んで行き大門を叩きつける。

「開けてくれ、この内地人を入れてくれ。」

又駆け出す。大門を叩く。

「もう僕は鮮人ぢやねえ。玄の上龍之介だ。龍之介だ。龍之介を入れてくれ。」
どこかで雷がごろごろと唸つてゐた。

玄龍が自分のことを「内地人」として認識し、また、そのことをやたらに強調するところからは、滑稽というより、ある種の悲しみさえ感じさせるが、そうした玄龍の「内地人」としての根拠になっているが、玄の上龍之介という彼の日本名である。名前がすでに玄の上龍之介であるからこそ、玄龍は自分を内地人として主張できたのである。「もう僕は鮮人ぢやねえ。玄の上龍之介だ」という認識は、以前は「鮮人」であつたはずの玄龍が、日本名を獲得することによって、完全に内地人になり得たことを示しているといえよう。内地人であるか朝鮮人であるかは、その名前による心情的な態度の問題が大きく関係している。法律的に見れば、名前はどうかであれ、朝鮮の人々も一視同仁、内鮮一体の論理構造で、さまざまな差別はあつたにも関わらず、いわゆる大日本帝国の臣民であることは間違いないからである。実際に、創氏改名実施の遙か以前から、そういう理屈を盾にして、朝鮮人の名前を使いながらも、自分が日本人であることを主張する人物が登場している。

一九二九年に発表された中島敦の「巡査の居る風景」のなかには、府会議員選挙の際、「黙れ、ヨボの癖に」と揶揄する群衆にむけて、朝鮮人の候補者が、

私は今、頗る遺憾な言葉を聞きました。併しながら、私は私達も又栄光ある日本人であることを飽く迄信じて居るものであります。(28)

と反論し、「場の一隅から盛んな拍手」をもらう場面がある。「場の一隅」とは、日本人集団の場と思われるが、とにかく、朝鮮の人も「栄光ある日本人」であるという論理は、それ自体としては十分可能だったのである。しかし、「ヨボ」と揶揄されることからわかるように、それはあくまでも理屈上の話にすぎない。法律的にはいくら日本人になったといっても、朝鮮人が日本人になるためには、もう一つの、多分に心理的な通過儀礼を要するのである。その儀礼になるのが日本名を名乗ることである。創氏改名により、「形よりする内鮮一体具現の途を拓いたとする日本の官憲の評価や(28)、また、これを欲迎する一部の朝鮮人の意見からも、朝鮮人から日本人化していくときに、日本名がいかに大きく心理的に影響したか推測できる。『高等外事月報』の記録のなかから、この制度を評価する朝鮮人の言説をみると(29)、

・従来、金、朴、等名乗ると直ぐ様、朝鮮人として特別扱を受け甚だ不愉快なりしも、今後は創氏に依つて其の不愉快より免れ得て、内鮮一体の具現の感あり。(咸北、同志社大学、梁原義雄)

・朝鮮に創氏制度実施せらるることとなりたるは吾々の待望し居りたる処にして、愈々皇國臣民として真に内鮮一体の具現を期し得べく、当局の勞苦に対し感謝す。(平安北道、耶蘇教長老)

「内鮮一体の具現」というのは、朝鮮人が日本人化していくことで、その日本人化が日本名を名乗ることによって最終的に実現されるという論理構造なのである。つまり、名前こそが朝鮮人か、あるいは日本人かを分ける物差しとして一応は考えられていたのである。それはいわば、制度、法律的にはすでに日本人になっている状況のなかで、朝鮮人同士が持っている内部の心情的な論理ともいえる。それで、朝鮮名を名乗れば朝鮮人として生きることになり、日本名を名乗ると自ら朝鮮人であることを否定し、日本人のなかに自己存在を接近していくことになる。もちろん、日本名を名乗ったからといって、ただちに日本人として認められ、そのように生きていくことができるとは思えないが、少なくともその名前による生き方の微妙な心理変化が生じるのである。その心理を よく捉えたのが、前述の「光の中に」である。

「光の中に」では、△私▽の名前が南(なん)と呼ばれるか、南(みなみ)と呼ばれるかが大きな問題になっている。また、それを取りまく周囲の反応と主人公の認識においても、朝鮮人として生きることと朝鮮名を固く結び付けている。△私▽が南(みなみ)と呼ばれることに猛抗議する李青年の態度はまさにそういう心情の表現であろう。また、主人公の△私▽も、「この地(日本、筆者注)で

朝鮮人であることを意識」する「自分一人の泥芝居」からくる「卑屈」と「屈従」の心理から南（みなみ）を容認したが、最終的には南（なん）という朝鮮人としての自分を取り戻すことになる。それは、山田少年の母においても同様である。「光の中に」においては、日本名から朝鮮名を取り戻すことによって、登場人物のすべてが自己を取り戻したことになり、最終的に救われるかたちになっている。しかし、「天馬」での玄龍の場合は、「光の中に」とは対照的な態度を示している。彼は、創氏名のイニシャルとは言え、一応、朝鮮名らしい二文字の玄龍から、最終的には内地人としての玄の上龍之介に戻ってしまうのである。それによって、彼には、「光の中に」のような「救い」が訪れることはない。彼が朝鮮人であることを否定すればするほど、なおさらその事実にもどわされ、いよいよ狂気にいたるのである。

もはや彼の足は躓きいたりのめつたり、水溜りにあやまつて落ち込んだりしてゐた。でも彼は夢中になつて這ひ上る。その時に突然足元の方で蛙共が、

「鮮人」

「鮮人」

と騒ぎ出したやうに聞こえたのである。彼は怯えたやうにいきなり耳を塞いで逃げ出しながら叫んだ。

「鮮人ぢやねえ」

「鮮人ぢやねえ」

彼は朝鮮人であるがための今日の悲劇から胸ふるひしてでも逃れたかつたのである。

「朝鮮人であるがための今日の悲劇」から逃れるために、彼は玄の上龍之介という日本名を主張することになるが、結局その行動によって狂乱し、破滅していくのである。名前による主人公の救いと破滅のかたちが、「光の中に」と「天馬」の二作において見事に対照をなしているといえる。

一方、「天馬」では創氏改名と密接に関わっている言語の問題が大きく取り上げられている。国語（日本語）の使用は、創氏改名と二本柱をなすもので、この時期の朝鮮で盛んに取り沙汰され、朝鮮語の新聞、雑誌の廃刊というかたちで強制されていく。「天馬」では創作において、国語を使用するか、あるいは朝鮮語の使用を認めるかの議論がなされている。その際、玄龍は、「僕はもう朝鮮語の創作にはこりました。朝鮮語なんか糞喰らへです。だつてそれは滅亡の呪符ですからね」ときっぱり朝鮮語の使用を否定する。それに対し、青年評論家李明植は、「朝鮮語でなくては文学が出来ぬといふ訳ではない」と断りながらも、「朝鮮人

の八割が文盲であり、しかも字を解する者の九〇％が朝鮮文字しか読めないといふ事実」を取り上げて、朝鮮語の必要性を訴える。

「朝鮮語での述作がこの人達に文化の光を与えるためにも、はた又彼等を愉しませるためにも、絶対的に必要なのは論を俟たぬことではないか。今も厳として朝鮮文字の三大新聞は文化の役割を立派に果してゐるし、朝鮮文字の雑誌や刊行物も民衆の心を豊かにさせてゐる。朝鮮語は明らかに九州の方言や東北の方言の類とは違ふ。もちろん僕は又内地語で書くことを反対してゐるのではない。少くとも言語のシヨービニストではないのだ。書ける人はわれらの生活や心や芸術を広く伝えるために大いに働いて貰はなければならない。そして内地語で書くことを慥らずとする者、又は実際に書けぬ者の芸術のためには、理解ある内地の文化人の支持と後援のもとに、どしどしい翻訳機関でも拵へて紹介するやうに努めるがいい。内地語か然らずんば筆を折るべしといふ一派の言説の如きは余りにも言語道断である。

青年評論家の意見は、大体において金史良の「朝鮮文学風月録」(『文芸首都』1939・6)や「朝鮮文化通信」(『現地報告』1940・9)の金史良自身の意見と重なっている。つまり、「朝鮮文学風月録」では、張赫宙の「訴訟」(「朝鮮の知識人に訴ふ」を指す)に注目し、張赫宙の見解を「朝鮮文化座談会の中における林房雄の意見と同じ」ものとしながら、内地語で書くことについて次のように述べている。

内地語で書くべきであろうか。勿論書ける人は書いていい。だがわざわざあらゆる犠牲を払って内地語で書きものをするといふ場合には、その当人に非常に積極的な動機がなければならぬと思ふ。朝鮮の文化や生活や人間をもつとひろい内地の読者層へ訴へ出るといふ動機。又謙遜な意味で云へば、引いては朝鮮文化を東洋や世界へひろめるためにその仲介者の労をとりたいといふ動機。

(31)

さらに、内地語で書く切実な動機がなければ「内地語で書こうとする必要がどこにあらうか」と反問し、朝鮮の作家は「自分の読者層のために立派な自分の言葉で書くべきであり又書かなくてはならない」と主張する。さらに、朝鮮文学を専門的に翻訳するクラブなどを設立して内地文学に朝鮮文学を紹介する方法を提示している。しかし、金史良がいう、日本語で書く「積極な動機」というのは、「餓鬼道」で日本文壇に登場してきた張赫宙が言い続けてきたこととさほ

ど変わるものではない。張赫宙は、「朝鮮の貧苦の情を、広く世間にしらせたい」ために(32)、「外国語に翻訳される機会も多い」日本語を選択したというが(33)、「朝鮮文化風月録」での金史良の日本語創作への意見は先輩に当たる張赫宙の意見にほぼ重なる。

張赫宙は「朝鮮の知識人に訴ふ」のなかで、学校令、警察令、そして実施が予定されている義務教育と徴兵制をあげながら、「文人に直接問題になるのは、この義務教育である。今年これが実施されれば二十年後には朝鮮語の勢力は半分に減退する。更に三十年後には」という現実を提示しながら、「内地語に進出するのも、必ずしも排撃することはない」という(34)。張赫宙が、「国語使用の合理的な妥当性を論じたもの」として批判されるのは(35)、まさにこのような「功利的な言語観」によるもので(36)、そこには時代の転換期を迎えた張赫宙の時局認識が大きく関わっているように思われる。しかし、ここで一つの問題として残るのは、「内地語に進出」できない作家、つまり、日本語の創作ができない作家たちの問題である。この問題については、後の張赫宙、兪鎮午の対談「朝鮮文学の将来」において明確に提示されている。「今まで書いて来た作家が、誰も彼も国語で小説が書けるかといふと、さうではないんです。」という兪鎮午の意見に、張赫宙は、「結局その場合に、新しい作家が出るより仕様がなない。もし国語で書く文学が盛んになり、そしてそれが朝鮮文学の主流になるとすれば、全然作家が交替するでせう。」というふうに作家の交替まで予見している。こういう張赫宙の意見に兪鎮午は次のように述べる。

結局僕は思ふのですが、現在の作家がそのまま国語文学に移って来るといふことは事実上不可能だらうと思ふ。語学の点や、いろいろな点で。それをどしどし国語に翻訳する。国語で書ける人は国語で書く。そして新しい作家が出て来るのを待つんですね。(37)

こういう兪鎮午の見解は、「天馬」での李明植の意見と基本的にはあまり変わらなく、金史良の上述した二つの評論での意見ともほぼ同じである。つまり、これらの見解はある程度朝鮮側の共通したものである。しかし、朝鮮側のこうした見解というのは、あくまでも日本語創作が可能な作家に限るものである。唯一残された道が翻訳によるものであるが、ちょうどこの時期に、張赫宙は『モダン日本』に翻訳小説を紹介し、金史良自身も『朝鮮文学選集』に李光洙の「無明」を収録しているのである。

「日本語か朝鮮語か」との危機感が最初に示されたのは、一九三九年一月の

『文学界』の座談会「朝鮮文化の将来」である。その席で、日本側は朝鮮の作家が日本語と朝鮮語のうち、どちらで書くのを希望しているのかという李泰俊の質問に対し、秋田雨雀は日本語で書くことを要望し、さらに日本側を代表した林房雄は、「吾々としては朝鮮の諸君に申し上げますが、作品は総て内地語でやつて貰ひたい」ときっぱり答えている。「天馬」では玄龍を指すかたちで「内地語か然らずんば筆を折るべしという一派」として李明植によって批判されているが、これは実際の金文輯の姿とはやや懸け離れているところから(30)、李明植によって批判される「一派」とは、金史良自身の日本語創作への照れ隠しの一人芝居か、そうでなければ、具体的にこの時点の林房雄の言説を指すものであろう。

しかし、林房雄は翌年七月の「朝鮮の精神」では、「内地人の側に性急な日本語化論があるように、朝鮮人の側にも頑固な朝鮮語絶対保持論があるやうだ。どちらかに決めることは暫らくひかへて、氣長に解決の道を探したい」と多少軟化した態度で、「私は内地語論者で、朝鮮の作家が全部内地語で書く日の来ると望んでゐるが、性急にそれを主張することはやめる。遠き将来でかまはないのだ」と樂觀的な見通しを示し、その中間段階として「出来るだけ多く朝鮮文学を内地語に訳」することを主張している(40)。一九四〇年七月時点での林房雄の意見に限って言えば、それは、前述した兪鎮午、さらに張赫宙の意見とも結果的には同じ方向なのである。そして、林のいう「性急な日本語化論」の一例に当たるのが、「天馬」の玄龍であるが、李明植の口を借りた金史良の見解というのも現実の問題がより具体化されているだけで、結果的には林房雄のそれとさほど離れたものではない。金允植氏が「まったく選択の問題でもないのに関わらず、あたかも選択の問題であるかのように錯覚」したと批判したのは(41)、まさにこういう点を指摘してのことであろう。また、「天馬」を金史良の日本語創作においての必要な「悪鬼ばらい」と解釈した林浩治の説も同様の理由からであろう(42)。いずれの指摘もその根底には、日本語で創作が可能な作家たちの共通した見解しか提示できず、それが日本側の論理をほとんど越えられなかった事情が大きく響いているように思われる。しかし、国語専用を目の前にし、朝鮮語が危機的な状況を迎えたことを考えると、李明植の口を借りた見解が金史良の表現し得る、時代的な限界でもあったらう。

後に金史良はこの自作に対し、「かくも憎むべき主人公をよくよく横行する社会を呪ひ、且つさういふ人物をみて朝鮮人全般を兎や角云つて貫つては困る、云々」と感想を述べているが(43)、確かに「天馬」の玄龍には性格破綻的な一面があるにせよ、彼の悲劇は「朝鮮人であるがため」である。最初は、「内地から渡つてきたばかりの元官吏でまだ朝鮮やその文化の事情に疎い」大村に雇われ重用されたが、「朝鮮にも愛国熱は漸次高まつて所期の目的は殆ど達せられ」ること

により、利用価値が終った彼は捨てられることになる。「小説家玄龍にしてもさう悪い人間ではなく、性根は至つて弱い臆病者で、文学の才能にもいささか恵まれてゐた」にも関わらず、性格破綻者になっていくのは、この時代の朝鮮の特殊な事情によるものであることは再三いうまでもない。その観点からみれば、玄龍も一種の犠牲者といえなくもない。

しかし、作品での玄龍の不幸は、彼自身が積極的に日本語と日本名の世界に走つたところにある。「光の中に」で日本名から朝鮮名へ回帰してきた主人公が最終的に△光の中△に出られることができたとすれば、日本語と日本名に走つた玄龍は△闇の中△をさまようことになるのである。

5 「光冥」と創氏改名

『光冥』は一九四一年二月『文学界』に発表され、第二小説集『故郷』に収められた作品である。この時期になると、すでに朝鮮人の創氏改名は終わり、届出によるものと、無届により強制的に変えられたものを含め、一応朝鮮人のすべてが創氏改名したことになる。しかし、いくら創氏改名したからといって、その新たな名前がそのまま日本の支配構造のなかで受け入れられ、通用することは非常に難しかった。実施前後に、一部の朝鮮人のなかでは内地人の差別待遇を根本より撤廃するものとして歓迎され、また総督府もそのような効果を大きく宣伝したにも関わらず、現実的にはほとんど差別撤廃の効果はなく、かえって「内地人を装ふ鮮人を増加せしめ却つて内地人の感情を害」したことで差別されるか(マサ)、または朝鮮人同士からの新たな差別に苦しまなければならぬ状況に陥つたのである。つまり、名前はどうかであれ、朝鮮人はあくまでも朝鮮人であるということに差別される構造は変わらなかつたのである。その具体的な例が「光冥」での清水一家である。以下、その内容を見てみよう。

主人公の△私△は散歩の途中、朝鮮人と思われる十七くらい位の娘と十四、五の女学生服の娘とばったり出会つて、すぐ門札を確認したが、そこには意外にも清水某という表札がかけてあつた。△私△はそれを苦学生の文君に聞いたみたところ、清水というのは実は朝鮮の人で、奥さんが日本人であるという。そして、二人の娘のうち、女学生が先妻の子で、もう一人が朝鮮から連れてきた女中であるが、その女中を家のみんなが散々いじめているという。それを聞いた△私△は、文君と一緒に彼女を今の境遇から救い出そうとする。そうしたある日、女中は工場で働いている同郷の朝鮮人夫婦と仲良しになり家出をしてしまう。それを清水の奥さんは文君が連れだしたと思ひ込んで警察に訴え、文君は留置されることになる。清水一家のこうした行為に憤りを感じた△私△は、清水家を訪ねて直談

判することになるが、その話し合いのなかで、△私▽は清水一家の涙ぐましい努力と苦しみの話を聞かされる。周りの反対を押し切ったの内鮮結婚であったが、主人は朝鮮人ということで大学を出ても就職口がなく、家まで借りられない。それで仕方なく奥さんの家の籍に入れたが、何事にも卑屈になってしまったことなど、内鮮結婚してから直面するさまざまな差別と屈折の話を聞かされることになる。このような感情の触れあいのなかで、清水家との話はうまくまとまり、文君は無事釈放され、女中のとよも清水家から引き取られ、工場の男と新婚旅行に旅立つ。そして、後日、△私▽は道端で、朝鮮人の有名なスケート選手に微笑みの挨拶を送る清水さんの長女（先妻の娘）の姿を発見し、その変化した新たな光景からなんともいえない心の響きと感動をうけることになる。

以上、概要から分かるように、「光冥」は内鮮結婚の矛盾や内地での朝鮮人差別の問題が浮き彫りにされている作品である。そして、そのような差別と深く関わっているのが、朝鮮人の名前の問題として現れている。すでに指摘したように、「光冥」は創氏改名が完了してから半年経った時点で発表された作品で、この時期になると、すべての朝鮮人の名前が日本風の氏名に変わり、以前の名前は習慣上の名前に転落している。たとえば、作品に登場している文君の場合は、「文」は韓国の習慣上の姓であると同時に、その「文」が日本の民法上の法律名である「氏」に変わっていたのである。しかし、作品に登場する文君の場合はやや複雑な問題が残っている。作品では文君の名前に振りがなは付いていないが、作品の内容からみて朝鮮発音の△むん▽として呼ばれたに違いない。しかし、「呉をクレと読み、南をミナミと読むように、読み方を変えるだけなら、別に届は要」らないというから(45)、作品の文君の場合は届出をしなくても、そのまま△あや▽、△ふみ▽などというように、一応は日本風に読める名前である。当時の朝鮮の戸籍謄本では氏名に振りがなを付けることを要求せず、またその欄もないことから、文君の場合は創氏をしなくてもそのまま日本名としても受け入れられるのである。「文」というのは、「光の中に」の「南（なん、みなみ）」のように、日本と朝鮮の間に揺れ動くきわどい線上にたっている名前である。もちろん、それが創氏改名の際には、自分は創氏をしなかったという心理的な抵抗の線にもなりうる名前である。一方、作品では「光の中に」での李君を思わせる人物が文君に変わっていて、一目で朝鮮人とわかる名前的人物は見あたらない。まず、主人公の△私▽の名前が明記されていない。作品には、清水の奥さんが「私の差出した三字並びの名刺を胡散臭さうに眺め」る場面があるから、△私▽が朝鮮名を名乗ったことは推測されるが、その肝心の名前は確認できない。△私▽だけではなく、姉や義兄の名前、姪の姓もはっきりしない。清水家の主人の姓や女中のとよの姓も確認できない。ただ、文君の姓だけが明確になっているが、「文」という姓は日本

読みでも可能な名前である。となると、少なくとも作品の表面的には朝鮮人の名前はつきり明記されている登場人物はいないということになる。すでにこの時期になると、作品の中で朝鮮人の名前を明示することにはばからざるを得ない事情があったかどうかは確認できないが、少なくとも創氏改名に対する金史良の明確な意図があったことは推測できる。というのは、後の「親方コブセ」でも登場人物がすべて創氏改名し、また、それも露骨におかしく創氏しているからである。しかし、「光冥」では、姓は明記されていないが、名だけは確認できる人物が見られる。△私▽の姪にあたる恵ちゃんと女中のとよがそれである。女中のとよという名は、朝鮮のことをひたすら隠そうとする清水家によって命名されたので、当然日本名になったのであろう。しかし、恵ちゃんは一応は日本名である。朝鮮名に強い執着をみせている△私▽とそれに同調していると思われる姉一家の一人娘の名が日本名なのである。勿論、恵ちゃんというのは、どこまでも日本での愛称で、他に朝鮮風の×恵や恵○であるか、あるいは日本風の朝鮮名として恵子である可能性は残っているが、作品での一貫した使い方から、そのまま日本名と見て差し支えない。となると、親達は朝鮮名に固執し、子供には日本名をつけるという構造になる。同じケースを恵ちゃんの友達である信子からも窺える。信子は、「新宿のある支那料理屋のкокク王さんと、内地人の奥さんとの間に出来た子」であるが、その名は中国風ではなく、日本風なのである。もちろん、ここでの王さんも、清水家の主人のように、奥さんの籍に養子として入れられている可能性も考えられる。以下、本文から名前をめぐるさまざまな想念を考察してみよう。主人公の△私▽は、日本に来てからほとんど本能に近い直感で朝鮮人を見分けることができる人物である。その△私▽が二人の娘と最初に出会ったとき、すぐ朝鮮人と判断し、習慣として少女達が立っている家の門札を確認する。当たり前のように、朝鮮人の門札が掛かっていると思ったからである。

そこには思ひの外内地人の名前が清水某とかほそく書いてある。でも、私はふんといつた気持でそれを真にうけようとはしないで、郷里のものに違ひないときめ込むのだった。

しかし、そこには△私▽の予想とは裏腹に、「思ひの外」「清水」という日本名が出されていたのである。それを見た△私▽は、「ふふんといつた気持」で多少軽蔑のまじった感情を示す。△私▽は朝鮮人なら当然のように朝鮮名の表札を出すべきで、日本名を出すのが「思ひの外」のことと思っていたのである。作品発表当時の状況からみれば、創氏改名がすでに完結され、朝鮮人はすべて日本名を名乗らざるを得ない状況である。つまり、朝鮮人のすべてが創氏改名し、だれ

もが法律名としての日本名をもち、以前の朝鮮の名は習慣のレベルにおちいたのである。常識的に考えれば、法律名の日本名を表札に出すのには、なんの問題もなく、またそれが当たり前でもある。さらに、この清水という人物は、日本人の奥さんと養子縁組みをして名前が変わっているから、清水を名乗り、清水の表札を出すのは、日本の常識から見れば至極当然のことである。一方、そう非難している「私」でさえ、自分の意図とは関係無しに創氏されており、さらに、清水を「私」と一緒に非難している文君の場合は、たとえ彼が創氏をしなかったとしても、そのまま「あや、ふみ」と呼ばれるかたちで、創氏したことになるからである。こうなると、創氏をしたかしたかという問題ではなくなる。法律と制度がどうであれ、朝鮮人は堂々と朝鮮の名前を名乗らなければならないという主義である。「私」と姉、文君の考えはこういう主義に貫かれているといえる。それは、朝鮮人は朝鮮人として堂々と生きることを要求する多分に感情的な問題である。清水一家が非難されるのは、彼らが朝鮮のことをひたすら隠そうとするからであり、その行為が「私」や文君には卑屈と偽善に映ったからである。

「名札は清水とか出してゐたけれども、僕も何んだか信じられませんでしたね」「さうでせう。清水といふのも実は朝鮮の人で、女房だけが内地人なんですよ。二人の娘の中、女学生の方は先妻の子で、それも又きつするの朝鮮人といふ訳です。・・・(後略)」

先妻の子ではあるが、内鮮結婚をした清水家の娘になっている女学生に対しては、「きつするの朝鮮人」という認識を示している。それは、強烈な血の論理で、しかも、父系中心である。その論理からすると、日本の女性と結婚したことで、清水を名乗るということは、「私」に「信じられ」ないことになる。

これと似たような問題は「光の中に」でも提示されている。そこでの山田少年は、日本人の父と朝鮮人の母の間に生まれている。その少年が山田を名乗るのはなんの問題もなく、作品のなかでもごく当然のように扱われ、「私」もそのように受けとめている。山田少年にとっては、血の遺伝として受け継いでいる「朝鮮的なもの」を認めるのが一つの問題になっており、名前のことはいっさい問題にならない。父系中心の思考からみれば、それは当然のことである。しかし、山田少年の母の場合は全く違う。彼女は、子供が差別されるのを恐れ、最初は山田貞順と言い張るが、最後には自分が「朝鮮の女」であることを告白することになる。もちろん、告白しなくても、「貞順」といういかにも朝鮮風の名から、彼女の素性をだれもがわかるようになっていく。また、彼女の山田貞順という名前は、「光冥」の清水家のように、朝鮮人ということをはたすら隠そうとしたもの

ではない。日本の民法によって、「山田」に変えられたが、いかにも朝鮮名らしい名をそのまま残しているからである。つまり、改名はしていないのである。そこで、「光の中に」の△私▽も彼女の名前については問題にしないのである。しかし、清水家についての△私▽の態度は全く違う。その根底には、父系中心の血の流れを尊重し、名前は絶対変えられないという、朝鮮の伝統的な意識が△私▽に強くあるからであろう。

ここで一つ指摘しておきたいのは、「光の中に」と「光冥」が同じ意図で書かれた非常に類似した作品であることである。まず、△光▽と△闇▽の部分を書き彫りにしたその題目がごく類似している。また、二作とも△闇▽の世界から「光」の世界に出てくる過程を主題にしているが、その△闇▽に当たるのが「日本的なるもの」であり、△光▽の部分が「朝鮮的なるもの」を取り戻すことになっている。そして、「日本的なるもの」と「朝鮮的なるもの」をそれぞれ象徴しているのが日本名と朝鮮名である。金史良は作品集『光の中に』の序文で、「光の中に生きてみたい」という願望を記しているが、その△光▽というのが、同じく△光▽を題目にしたこの二作では、おもに名前の問題として取り上げられているのである。これは、金史良が朝鮮人の名前の問題について非常にこだわっていたを示すものであり、事実、金史良自身は創作活動においても創氏名を最後まで名乗らなかった。当時の朝鮮の多くの作家たちが創氏名を名乗るなかで、朝鮮の本名を名乗り続けるのは、それだけのこだわりと強い意識が要求されたと思われる。一方、この二作においては、金史良の分身でもある△私▽の造形が非常に類似しているが、それは李君と文君の役割と性格においても窺える。また、内鮮結婚をした夫婦という作品設定も同じである。このことから、「光冥」は「光の中に」の以降の話で、「光冥」の△私▽は、「光の中に」で南（みなみ）から完全に南（なん）へ回帰し、成熟した△私▽のように思われる。このような△私▽の論理からとすれば、清水の論理は到底許し難く、△私▽は彼に本名を名乗ることを強く迫るのである。

「（前略）・・・早い話が、どうして公々然と御主人の本名の名札を出せないのでせう。又朝鮮人を女中に使つてゐることを、それほど苦にせねばならぬのでせう」

このような△私▽の言葉は、時代状況からみると非常に危険な考え方である。創氏改名が終わった時点で、わざと本名を出すという主義は、総督府の政策を正面から否定することになるからである。ましてや、養子縁組みによって変わった名前を、わざわざ元の名前に戻すということは、日本の民法の体制を根本から否

定するものである。もちろん、こういう△私▽の論理は、あくまでも情動的なもので、法律とか、理屈の問題ではない。名前に対するこのような△私▽の頑なな姿勢は、創氏改名をむかえた金史良の断固たる態度と重なることはいうまでもない。

一方、創氏改名は差別問題とも深く関わっている。作品での清水家も差別を避けるために名前を変えているのである。

「やつてみましたの。何もかも。初めはさういふ理想で、周囲の反対を押し切つて二人も一緒になりましたの。だがそのままではどうしても駄目だったので。主人も東京でどんなに苦労したことでせう。大学は出てゐるのに、どこへ履歴書を出しても就職は出来ない。家は借りられない。それでたうとうあの人を妾の籍へ入れるやうにしたのです。それからといふもの、あの方は妾に対して何事も卑屈になつたのです。・・・(後略)」

清水一家が女中の日本語の上達を厳しく要求したこと、家族のみながひたすら「朝鮮なるもの」を否定したことも差別から逃れるためである。作品での清水一家は差別から逃れるため日本名を名乗ることになるが、とくに「内鮮で婚姻関係をもつた人達は尚更」そのような必要性があったという(45)。創氏改名の以前から主人が朝鮮人である場合、一つの方法としてよく使われたのが養子縁組みである。清水家もまさにこのようなケースであると思われるが、実際、創氏改名はこういう悩みを解決する一つの方法としても宣伝されたのである。

「(前略)、この改正によって婿養子縁組も出来れば嫁入後はもちろん婿家の氏を名乗るわけで、同時に内地に居住する半島人おおよそ百万人も日本式の氏名が正式に認められて、差別的なところがなくなって大に内鮮融和の實があがるといふものです。」(47)

しかし、創氏改名にしろ、養子縁組みにしろ、日本名を名乗ることは、「光の中に」「天馬」「光冥」でみるように、なんの問題の解決にはならなく、その行為自体によって登場人物が没落してしまう。結局、「朝鮮的なるもの」に戻るしかなく、そこにこそ△闇▽のなかから△光▽の世界に出られる救いがあるという設定である。「光冥」の結末近くで、清水の長女が有名な朝鮮人のスケート選手に同情的な微笑みを送る場面は、この少女がこれから「朝鮮的なるもの」を認めて生きていくことを暗示し、清水家がやっと△冥▽の世界から△光▽の世界に出られたことを象徴的に示すものであろう。

6 「親方コブセ」と創氏改名

「親方コブセ」は、一九四二年一月号の『新潮』に発表されたもので、金史良の日本での最後の作品ではないかと推測される作品である(48)。作品の内容になっている運動会や、親方コブセなどの登場人物は、実話に基づいていて、作品の制作時期もほぼ断定できる。それによると、この作品の内容と制作時期は、一九四一年十一月終わりから十二月初めの太平洋戦争勃発の前までであったという(49)。この時代背景を考えると、作品に登場する朝鮮人労働者は、太平洋戦争を直前にして、差し迫る戦争のことはなにも知らされずに、到着した時にはすでに戦地になっている南方へ大量に(親方コブセの班でも二〇名)赴いたということになる。これはただの出稼ぎというものではなく、実際には戦争に動員されたものであるろう。しかし、作品の朝鮮人労働者達はなにも知らずに、同僚に誘われたり、あるいは他人の代わりで、気軽な気持ちで出稼ぎに出発するのである。その南方でなにが彼らを待っていたかはその後の戦局から十分推測できるのである。

「親方コブセ」のなかには、出稼ぎに南方に赴く人達や、運動会に参加しているさまざまな朝鮮人労働者が登場している。そして、そのいずれの朝鮮人労働者も奇怪な日本名を名乗っている。韓原、崔本、李山、朴沢、馬川、玉村、金海などがそれである。いちおう日本風に創氏はしているが、一目で朝鮮人とわかる名前なのである。

創氏改名が始まってから、この制度のなかで、できるだけ自分の朝鮮名をそのまま残そうとする民衆の動きがあった。その方法として、名前の付け方にさまざまな工夫をこらしたのである。その一例は、梶山季之の小説「族譜」で見ることができるが(50)、ここでは、朝鮮姓の壁を草冠を別に分離して「草壁」と創氏している。つまり、一文字の漢字を分離して日本風の二文字にする方法である。もう一つは、朝鮮の本貫を使うことによって、自分の姓の出自を残そうとしたことである。これは、日本側からも「本貫、原籍、又先祖の人以来永らく住んで居た地、又生れた所、その他特殊の因縁の地などから適当なものを選びそれを国語の訓で読むのが、一番理想的」なものとして奨励されたことから(51)、割合一般的に使われた方法である。作品中の金海(金海金氏である)がその一例に当たるといえるが、「金海」は、他の登場人物のように、金という姓に海をつけた形としても解釈できる。そして、一番手っとり早い付け方が、朝鮮の姓のうしろに日本人の名前でよく使う田、山、川、村、原、沢、本などをつける形である。作品に登場するほとんどの朝鮮人土方の名前がこういうふう創氏されている。この方法が本来の姓を残す一番確実で、わかりやすい方法だったのである。

しかし、「親方コブセ」でのこういう奇怪な創氏名は、いうまでもなく、彼らの本意によるものでなく、やむを得ない事情によって創氏させられたものと思われる。当時の事例からその一端を紹介しよう(52)。

・日本名をつくる気持ちはなかった。釜山で切符を買うとき、日本名を作らないと日本へは行かれないと言われてつけた。元の金を残すように金本とつけた。

・警察のほうでうるさくいうので自分で考えて、高に山をつけただけ。
・飯場で働くうちに、池田がいいというのでつけた。

「親方コブセ」での朝鮮人土方達も、おおよそこのような事情によって創氏したと思われる。仕方なく創氏はするが、あくまでも本名を残そうという主義である。一方、彼らは故郷をも追われて日本に渡り、最後は南方の死地に連れていかれるという更なる犠牲を強いられている。植民地社会の最底辺に置かれて、悲惨な生活を強いられている彼らにとっても、姓は守らなければならぬものであったろう。彼らの悲惨さがかえって朝鮮の姓への執着をより強くしたとも考えられるが、なかでも、馬川を名乗る人は朝鮮でも差別される姓であるのにも関わらず、その馬という姓をそのまま残している(53)。「光の中に」では、東京帝大出身の△私▽が南(なん)と南(みなみ)の間を揺れ動き、「天馬」では知識人評論家が玄の上竜之介を名乗り、「光冥」では大学出身の知識人が清水に変わってゆくなかで、植民地の一番犠牲者であるこういう層によって朝鮮の姓は強く意識されたのであろう。そして、彼らのこのような異様な名前こそ、自分が朝鮮人であることをこれ以上に強烈に主張するものはないであろう。その点、創氏改名に対する金史良の激しい批判の姿勢も窺い知ることができる。

7 むすび

以上の考察から、金史良は創氏改名に特別な関心を示していたことが確認できる。また、作品での登場人物の創氏観は、そのまま金史良自身の創氏観を反映するものであり、彼は、これらの人物を通して、創氏改名が持つ矛盾を明らかにし、この制度への強い批判の姿勢を明らかにしているといえる。

創氏改名を直前に控えた時期の「光の中に」では、知識人青年で、作家の分身でもある△私▽の、名前に揺れ動く心境が問題になっている。便宜上南(みなみ)と呼ばれているという△私▽の論理は、ただの卑屈と屈従の感情にすぎなく、最終的に△私▽は朝鮮名という△光▽の世界に出られることになる。ここでの△私

∨の姿勢は、これから始まろうとする創氏改名への明確な反対、それに対する∧私∨の心構えになるであろう。一方、「天馬」では、創氏改名に対する朝鮮の知識人作家の行動ぶりが取り上げられている。玄龍は自ら進んで創氏改名し、その世界のなかで生きようとする人物であるが、彼が創氏名をもって日本化すればするほど、彼の破滅はいよいよ決定的になる。「天馬」の玄龍は、∧闇∨から∧光の中∨に出られることになる。「光の中に」での∧私∨とは正反対に、∧闇の中∨にどんどん突き進むことになる。そして、彼を破滅にむかわせるのが、彼が誇りに思っている日本名の「玄の上竜之介」なのである。同じく、創氏問題をめぐって、∧光∨と∧闇∨の部分が浮き彫りにされている「光冥」では、内鮮結婚し、日本で暮らしている知識人の創氏と養子縁組みの問題が取り上げられている。日本での生活上、やむを得ず日本名を名乗る清水一家は、「天馬」での玄龍のような創氏ではないにしても、日本名を名乗ることによってさまざまな内部の屈折と矛盾を抱えることになる。そして、いよいよ破綻していくが、最終的にはやっと朝鮮人としての自己認識を取り戻すことができ、かすかな光の世界にむかうことができるのである。そして、日本での最後の作品である「親方コブセ」では、日本の社会の底辺で働く、朝鮮人労働者たちの創氏問題を扱っているが、そこでは創氏が一層鋭い批判のかたちを取っている。彼らの奇怪な名前は、それ自体が創氏改名への強烈な批判になり、またこの制度自体をほとんど無意味化さえしているといえる。

注

- (1) 宮田節子・金英達・梁泰昊『創氏改名』（明石書店、一九九二年）。制令十九号及び制令二十号からの引用は、本書から転載されたものを利用した。
- (2) 朝鮮の「姓」は、日本の「氏」（日常慣用語では姓と同じ意味で使われているが）とは根本的に違うものである。日本の「氏」は、その人が属する同一戸籍の家族集団である家の名称であり、婚姻や養子縁組による家の変動で「氏」も変わる。しかし、朝鮮の「姓」は、先祖の発祥地名を表す「本」（「本貫」ともいう）と男系血縁系統を表す「姓」の組み合わせによって構成されたので、結婚による「家」の変更によっても「姓」は変わることなく、また異姓の養子縁組も基本的には不可能である。つまり「創氏改名」は、朝鮮人の「姓」を変えたのではなく、旧来の「姓」はそのまま残して、新しく日本の家族制度による「氏」を創ったものである。このような兩國の「氏」と「姓」の微妙な違いは、当時にさまざまな混乱と誤解を招いた。

(3) 「ハ秘」、朝鮮及び台湾在住民政治処遇ニ関スル質疑応答」(内務省管理局、一九四五年三月六日)。注(1)の「創氏改名」からの再引用。

(4) 李淑子「日本統治下朝鮮における日本語教育」(『朝鮮学報』第七五輯、一九七五年)によると、第三次朝鮮教育令は「激化する戦時体制を反映して「皇民化」を尖鋭化したもの」であるという。

(5) それらの事情は、宮田節子編・解説『高等外事月報』(「十五年戦争極秘資料集六」不二出版、一九八八年)に詳しい。創氏改名の翌月の高等関係の記事の中には、「氏創定に対する言動調」という項目を設定し、創氏改名に対する朝鮮民衆の言動を分析、紹介している。その分類によると、「賛意を表する言動」八例、「反対の言動」十七例、「流言蜚語」六例がある。

「賛意を表する言動」の場合は、総督府の政策を誉め讃えるきまり文句を列べたものがほとんどであるが、「反対の言動」となると、抑える表現のなかでも創氏改名に反対するさまざまな民衆の本音が滲み出ている。そのいくつかを紹介する。

・内鮮一体は氏の設定よりも内地人の差別待遇を根本より撤廃するに在り、假令本制度実施後と雖、朝鮮人は内地に本籍を置くこと不能なる為至難なる問題なり。(忠清南道 農業従事者)

・鮮人の創氏に依り内地人を装ふ鮮人を増加せしめ却つて内地人の感情を害し、内鮮一体を阻害する結果となるべし。(全羅北道某金融組合理事)

・吾々両班儒生は現在こそ疲弊して居るも、曾ては朝鮮社会に於ける上流階級に属し、風俗言語等に於ても取るべき点ありて優越的立場にありたるも、今後内地式に氏を創定せば両班と常民との身分的区分付かず、吾々は優越的地位と声価値を失墜し社会の混沌を来すべし。(慶尚北道 両班儒生)

・鮮人が創氏するも内地人と同様の待遇を受くる筈なく、何等変ることなきに付、假令同族同門は創氏するも自分は其の意志毛頭なし。(京畿道儒生)

ほかに、同年八月には、「夏季休暇帰省学生の言動」という項目で、「創氏制度関係」の在日留学生の言動が集められている。また、創氏改名に露骨に反対した人を時局犯罪として処罰したのも数件見られる。その一例を紹介すると、

・創氏は総督政治の内鮮一体の口実の下に為すものにして、将来朝鮮が独立せば今日創定したる内地式氏を旧姓に改姓するに至り徒らに手数を要する非ずや、現在朝鮮には参政権は勿論、義務教育も兵役義務もなし、氏のみ内地式に創定するも結局形式的内鮮一体に非ずや云々と、不穩言動を弄したるものなり。(忠州署 金漢奎 四月九日検挙 四月十九日起訴意見送局)

(6) 『京城日報』(一九三九年十一月二十六日付)には、「金文輯酒と縁切り」

「名も大江龍無酒之介」という見出しで創氏改名に至った氏の心境が語られている。

- (7) 『毎日新報』(一九四〇年二月二十日付)
- (8) 「芥川龍之介賞経緯」(『文芸春秋』、一九四〇年三月)
- (9) 朝鮮特集と朝鮮統治に関しては、梶井陟「現代朝鮮文学への日本人の対応」(『富山大学人文学部紀要』六号)、朴春日「韓国ブームの虚像と実像」(『近代日本文学における朝鮮像』未来社、一九八五年)に詳しい。
- (10) ジャン・ヒョンジュン「作家金史良とその文学」(『金史良作品集』、文芸出版社、一九八七年、平壤)。この論文は『金史良作品集・駕馬万里』(東光民族文学全集九、東光出版社、一九八九年、ソウル)に転載されており、それを利用した。なお、人名の片仮名表記は漢字名が確認できないため、そのまま朝鮮語音読みにした。以下、注(11)もこれと同じ。
- (11) イ・サンキョン「暗黒期を照らす民族解放の文学」(『金史良作品集・駕馬万里』(東光民族文学全集九、東光出版社、一九八九年、ソウル)
- (12) 「内外地一体化の親族相続法確立」(『朝鮮公論』、一九三九年七月)
- (13) 奥山仙一「内鮮一体と内地式改姓」(『朝鮮』、一九三九年八月)
- (14) 鄭僑源「内鮮一体の倫理的意義」(『朝鮮』、一九三九年十月)
- (15) 「母への手紙」(『金史良全集三』に所収)
- (16) 安宇植『金史良評伝』(草風館、一九八三年)
- (17) 「小説集跋文」「光の中に」(『金史良全集三』に所収)
- (18) 「朝鮮文化通信」(『金史良全集三』に所収)
- (19) 金聖民『緑旗連盟』(羽田書店、一九四〇年)
- (20) 緑旗日本文化研究所編『誰にもわかる氏の解説』(緑旗連盟、一九四〇年)
- (21) 任展慧「金史良全集一」の解説。
- (22) 注(1)に同じ。
- (23) 金允植『韓国近代作家論巧』(一志社、一九七四年、ソウル)
- (24) 川村湊「金史良と張赫宙」植民地人の精神構造」(岩波講座『近代日本と植民地六』抵抗と屈従』岩波書店、一九九三年所収)
- (25) 「天馬」の登場人物とそのモデルについては、金允植『韓日文学に關連様相』(一志社、一九七四年、ソウル)で指摘された。しかし、「東京文壇の作家田中」の像は、川村湊「花豚正伝」(『満州崩壊』文芸春秋、一九九七年所収)のなかで、田村泰次郎であることが新たに判明された。本稿もこれに従った。
- (26) 金允植『韓日文学の關連様相』(一志社、一九七四年、ソウル)

- (27) 注(26)に同じ。
- (28) 「巡查の居る風景」(『中島敦全集3』筑摩書房、一九七六年)
- (29) 注(5)に同じ。
- (30) 注(5)に同じ。
- (31) 「朝鮮文化風月録」(『金史良全集4』河出書房新社、一九七三年)
- (32) 「私の小説勉強」(『文芸』、一九三九年十一月)
- (33) 保高德蔵の後日の述懐によると、「餓鬼道」が『改造』の懸賞募集に当選した直後、張赫宙に会って、「何故朝鮮語で小説を書かず、日本語で小説を書くか」と聞いたところ、彼は「私はこの実状をどうかして世界に訴へたい、それには朝鮮語では範圍が狭小である。日本語はその点、外国に翻訳される機会も多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならない」と答えたとという。「日本で活躍した二人の作家」(『民衆朝鮮』四号、一九四六年七月)
- (34) 張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」(『文芸』、一九三九年二月)
- (35) 林鐘国著・大村益夫訳『親日文学論』(高麗書林、一九七六年)
- (36) 注(24)に同じ。
- (37) 対談(張赫宙、兪鎮午)「朝鮮文学の将来」(『文芸』、一九四二年二月)
- (38) 『朝鮮文学選集』赤塚書房、一九四〇年
- (39) 注(24)と同じ。川村湊は、『文学界』の座談会「朝鮮文化の将来」(一九三九年一月)においての金文輯の発言を取り上げ、「それだけを見てみると、朝鮮語の独自の価値を主張しているのは金文輯」であると指摘しながら、金文輯においての民族語へのこだわりは、本質的な問題以前の「個人的なルサンチマンから生じた」と批判している。
- (40) 林房雄「朝鮮の精神」(『文芸』朝鮮文学特輯号、一九四〇年七月)
- (41) 金允植「韓国近代文学思想史」(ハンギル社、一九八四年、ソウル)
- (42) 林浩治「在日朝鮮人日本語文学論」(新幹社、一九九一年)
- (43) 「朝鮮文化通信」(『金史良全集3』に所収)
- (44) 注(5)に同じ。同書の十三号には、日本の事情に詳しい留學生の発言が載せられているが、そこでも同様の発言が見られる。「内地に於て我々が創氏改名するとき、内地人は内地人を装ふ生意気な行動なりとして、却つて悪感情を抱きあり、而も此の感情は内地人の誰もが持つ共通の感情なりと云ふを得。(黄海道出身、留學生)」
- (45) 注(20)に同じ。
- (46) 注(20)に同じ。

(47) 『大阪毎日新聞』(一九三九年十一月八日付)の見出しは、「半島の同胞にも「氏」を名乗らず。矛盾の旧弊、差別を打破」とある。

(48) 金達寿『金史良全集二』解説。

(49) 注(16)に同じ。安宇植は同書で「親方コブセ」の創作時期について詳細に分析しており、本稿はこれに従った。

(50) 梶山季之「族譜」。「梶山季之傑作集成」(桃源社、一九七二年)所収。「族譜」においての創氏改名については、金英達『創氏改名の研究』(未来社、一九九七年)に詳しい。

(51) 注(20)に同じ。

(52) 注(1)に同じ。

(53) 「馬」という姓は、朝鮮では一般的に賤民の姓として認識されている。

第2節 金史良文学に現れた白々教事件の影

1 はじめに

年譜によると、金史良は一九四〇年、芥川賞候補作に選ばれた「光の中に」をもって日本文壇に登場し、以後、「土城廓」「天馬」「箕子林」「草深し」「無窮一家」などの一連の旺盛な創作活動をし、同年十二月には、第一創作集『光の中に』を小山書店から上梓している(一)。第一創作集『光の中に』には、先にあげた作品のうち、「草深し」を除いて、「蛇」「コブタンネ」などが加えられている。「草深し」は、「総督府の色衣政策への痛烈な批判のために、第一創作集『光の中に』に収録することができなかった」という(二)。この指摘は、当時の状況からみても事実在即したもので、この作品に対する早い時期の評価からもそれが窺える(三)。しかし、「草深し」の作品全体から見た場合、色衣政策への批判は作品前半部分に限ったことで、むしろ話の中心は江原道の火田民の悲惨な生活や、その火田民を食い物にしている白々教の実態を浮き彫りにするかたちでなされている。そして、その白々教に関する具体的な記述は「草深し」から始まっているが、これは白々教事件との関連上の問題からであり、白々教の影を窺わせる東学系類似宗教への言及は比較的早い時期から始まっている(四)。

本論では、白々教の母胎になっている東学、あるいは東学系類似宗教を範囲に入れながら、白々教事件が金史良文学にどのような影を落とし、さらに変容していったかを、「草深し」を中心にすえて考察する。そして、このような類似宗教の影と変容過程を通して、金史良文学がもつ陰の一断面をもさぐってみる。

2 白々教事件

白々教のことが金史良文学に具体的に登場するのは、一九四〇年七月の『文芸』に発表された「草深し」である。この作は、上述した理由(総督府の色衣政策への批判)のためか、二冊の創作集には収められず、後に理論社発行の『金史良作品集』(一九五四年)に収録された。

まず、この作品の創作に関連する年譜的な事項を拾ってみると、「この奥山地带の人々の生活を調べようとして、僕達は九月(一九三九年、筆者注)の初日京城を發つたのだ。最後の目的地は洪川郡斗村面所在の、カマ連峰に点在する火田民部落」といったように(五)、彼は一九三九年九月に江原道を訪ねている。江原道には金史良の実兄(金時明)が洪川郡の郡守をやっていることもあって、以前からも「江原道の山奥に行つたのは、かれこれ七八回にも」なったという(六)。さら

に一九四〇年二月には、朝鮮の雑誌『朝光』に長編小説「落照」の連載を始めているが、ちょうどその時期に、前年十月『文芸首都』に発表した「光の中に」が芥川賞に選ばれ、四月には東京の授賞式に参席している。授賞式から帰郷してまともや彼は「江原道洪川郡斗村面カマ連峰を中心に火田民部落の実態調査」に赴いている(7)。「草深し」は、このように江原道の火田民への興味が盛んな時期に書かれた作品である。

しかし、「草深し」の創作においては、この時期の火田民に対する興味だけではなく、もっと直接的なきっかけになる歴史的な事件があった。それは当時の新聞や雑誌を大きく賑わせた白々教事件の公判である。一九三七年二月に発覚して世界的な衝撃を与えた白々教事件は、三年間の審理を経て最終公判に至り、一九四〇年三月十三日、十五日、十八日、十九日の四日間、京城地方法院の大法廷で公判が開かれることになったのである。「草深し」の中でもこの公判についての記述がある。

それから間もない或る日仁植は都から配達された雑誌の中で、今までその類例を見ない程に残虐を極めたといふ白々教の公判記録を読みながら、全身にぞつとするやうな悪寒を覚えた。

本文の「都から配達された雑誌」というのは、朝鮮語雑誌『朝光』の一九四〇年五月号で、そこには白々教事件の公判記録と論告文が全文掲載されていた(8)。金史良は当時この雑誌に長編小説「落照」を連載していたので、当然ながら彼のところにもこの雑誌が届いたであろう。

それでは、白々教事件というのは一体どのような事件で、白々教はどういう性質の宗教集団であったのか、当時の記録から見てもみよう(9)。

白々教事件が世に発覚したのは一九三七年二月のことである。信者の脱会をめぐって教祖全龍海と信者の息子との喧嘩が起こり、信者の息子が白々教の内幕を東大門警察署上往十里駐在所に申告することから事件が始まったのである。警察は以前殺人犯罪を起こして壊滅したと思つた白々教がいまだに地下に潜伏しているという事実を重視して、報道禁止の体制で秘密捜査に乗りだしたのである。そして捜査をするうちに白々教の驚くべき犯罪が続々現れ、警察は逃亡している教祖全龍海と幹部達の逮捕を急ぐ一方、検挙された犯人の供述により、夥しい数の死体発掘をも同時に進めることになる。しかし、教祖の逮捕には至らず、事件発生から五〇日後、自殺した教祖の死体を発見し、この事件の真相を世の中に公表するに至った。警察の公表によると、教祖らは逃亡する間際まで、証拠隠滅のため、三人の妾を殺害するなど、三〇〇人以上の夥しい殺人を重ねてきたという。

膨大な数の死体と洪水による死体の流失、さらに遺棄場所の移動もあって、警察の死体発掘は困難を極めたが、最終的に確認されたのは延べ一〇九回の犯行による、三一四名の犠牲者であったという。そして、犠牲者の三分の二は老幼婦女で、家族ぐるみで殺されたケースが多く、一度の犯行に十人以上殺されたことも二度あった。さらに、リンチや強姦なども数多く行われ、まさに狂乱を極めた殺人集団であったといえる。

白々教は近代朝鮮で流布したほとんどの類似宗教がそうであるように、東学教に根源したもので、東学教の傍系である白道教の分派として独立した宗教集団である。白道教は、「明治三十三年の頃、東学の教徒全延芸、当時三十才なる者が修道に依って道を得んと志し、三年間金剛山に入りて祈祷三昧に精進するや、天地神霊の心理を悟得するところあり、山を出で」創ったという(一〇)。当初は入信する者が増加し、一九一二年江原道金化郡の五聖山中に本拠をおいて教名を白道教と名付けて布教に従事したが、その教義なるものは「一定の呪文を誦して天地を礼拝すれば無病息災、不老長寿、遂には神仙になることが出来る」という儒教・仏教・道教を交えたようなものであるという(一一)。しかし、一九一九年教主の死亡により、教団は人道教と白々教に分裂され、以前の秘密結社的な性格から脱皮し、表面的な布教活動を始めたが、一九三〇年、初代教主が妾を殺害したのが暴露され、教団はまたもや地下に潜伏することになる。

白々教は全廷雲の二男全龍海によって主導されたが、その基本教義は白道教時代とほとんど変わらないものであった。当時流行していた『鄭鑑録』(一二)の予言書に基づいた新都邑思想と東学教の迷信を基底にし、さらに白衣の着用を強調することで民族的な色彩を強めたのがその特徴である。そして、その布教の際には、「近い将来に火の審判と水の審判があるが、天夫任(全廷芸)の時代には避水宮に避難させることになっていたが、彼(全龍海)は距離と交通関係もあって朝鮮全道五十三箇所にも本所を置き、水火の審判の時には、まず白々教徒をこの本所に一時収容し、後に金剛山の避水宮に移す。そこで三年間避難していると、天夫任が下降して東海の瀛山に連れていく者と、大元任(全龍海)が鷄龍山(一三)に連れていく者とを区別し、天夫任は東山の瀛山に連れていき、大元任は鷄龍山に連れていくが、鷄龍山に行けば大元任は王様になり、教徒は献金や手腕やその信仰の程度によって官爵が与えられ、新しい王様に仕え」ながら、高い地位と安楽な生活ができると誘ったのである(一四)。そして、その避難場所という地方の本所に教徒を強制的に火田民として定着させ、後に殺害したのである。以下、この白々教事件の影を作品の中から考察してみよう。

「草深し」の構成は、主人公の仁植が火田民疾病調査のため山に登る時点を前後にして二つに分けて考えることができる。そして、結末としての後日の回想の部分が付け加えられている。

まず登山前の部分は、主人公の仁植が江原道の山奥で郡守をやっている叔父を訪ね、そこで色衣奨励演説の通訳をしている旧師の鼻かみ先生と出会うことから始まる。鼻かみ先生は中学校の朝鮮語の先生であったが、仁植達が起こした教師排除の同盟休校に巻き込まれ免職になり、叔父の下で教化主事として色衣奨励に携わっていた。朝鮮人の叔父は、「誰一人内地語を知らう筈もない山民達に向つて態々通訳者を伴ひ全く哀れな」光景を演じ、その叔父の演説を真面目に緊張して通訳する旧師の姿から、仁植は「何とも云えないかなし」さを感じたりする。しかも、その色衣奨励演説の場には、日本人の内務主任ただ一人が、まっ白な服を着ているだけで、当の山民たちの白衣は、汚れてほとんど黒くなっている有り様である。にも関わらず、山民を集めて意味もない政策を強要し、山民の服に○や△や×をつけているばかばかしい光景を目撃した仁植は、「何だか救われぬ人々のお伽話の国に迷いこんだような」滑稽さをも感じたりする。その色衣奨励というのは、総督府の社会教化事業の一環として進められたもので、その建て前の理由としては、

今日朝鮮人の殆ど全部が最も好んで着用する白衣は、頻繁に洗濯の必要あるのと、之に従つて其の都度仕立直しをせねばならぬ関係上、之に費さるる時間と婦人の労力は非常なものであり、且つ地質を損じ、失費を多からしめ、経済上多大の損失を来たすのみならず、白衣を着ることに依つて利する所一物もないと謂つても過言ではなからう。(15)

というようなものであるが、その本質は、「総督府が民族性否定の植民地政策の一つとして、白の衣服を好んで着用した朝鮮人に色衣を強制した」ものという(20)。そのようなこともあって、山民たちもこの政策には安々従ってはいない。それが叔父に「奴等は狡いからわざとそういうふ服(黒く汚れている服)を着て来たのぢや」と言わせ、鼻かみ先生は奥さんの裳に墨をつけたことで散々叩き付けられるのである。つまり、色衣奨励に対する民衆の反発はかなりあったことを作品は示しているのである。そして、こういう朝鮮民衆の白衣を好む性質をうまく利用したのが、後述する白々教である。

一方、「草深し」の記述の中には、金史良の実際の体験と重なる部分がある。本文中には鼻かみ先生の排斥事件のことが書かれているが、

実は中学五年の二期のこと全校生を挙げて同盟休校に入つた時、仁植達はこの鼻かみ先生をも共に排斥したのである。それは彼を何より不憫に思つたからだった。

これは、平壤高等普通学校での金史良が「配属将校および日本人教師と、さらに彼らにおもねる朝鮮人教師の排斥」運動を起こして論旨退学にされ、後に佐賀高等学校に入学した事実が踏まえられている(二〇)。また、郡守の叔父と江原道の日郡は、実兄金時明と、彼が郡守を勤めていた江原道の洪川郡がモデルになっている。「草深し」の後日譚には、「この記録も又悲しみの多い青春時代の一つの日記」としながら、「その後月日は既に三四年を過ぎ」たという。とすると、「草深し」の内容になってるのは、一九三六年から三七年にかけてのことになる。兄金時明は、少なくとも一九三五年頃には江原道の洪川郡に勤めていたし、金史良もこの頃から兄のところを訪れていたことが確認できる。朝鮮の東亜日報の一九三五年の四月に六回に分けて連載された「山谷の手帳」には次のような記述がある。

我が心の煩悶と疲れ葬るところは、その清楚と素朴を感受する所、ただ江原道があると言えます。そこには親愛なる家兄が、またいとおしい幼い甥姪が私を喜んで迎えるでしょう。さらに親愛なる友達Rも理解してくれるからです。

(18)

佐賀高等学校を経て京都帝国大学を卒業し、二つの高等文官試験に合格するなどの秀才ぶりをほしままにした兄であるから、作品の叔父のような「へんちくりんな内地語の演説」をしたとは思えないが、日本語で演説してそれを朝鮮語に通訳させたことは、植民地の官僚という立場から作品の叔父とあまり変わらなかつたであろう。また、当時の状況から、兄も色衣奨励演説や火田民対策にも熱心に携わっていたことが容易に想像できる。そういう兄の仕事の一端を窺わせるものが、一九三六年四月の総督府機関雑誌『朝鮮』に発表された「農民精神培養に注力―江原道洪川農民訓練所」と(一九)、翌年の一九三七年三月『同胞愛』に発表された「洪川農民訓練―授与式における所長訓話」という兄金時明の論文である(二〇)。農民訓練所というのは、農村青年を指導訓練し、「心身を鍛錬して皇国農民たる信念と実力の培養に勤むる」ことを目的にした農民教育機関で、通常郡守がその所長を勤めていた(二一)。実兄の金時明がこのような一文を残していることは、『草深し』の冒頭が叔父の色衣奨励演説から始まることと考え併せると、二

人の人物においての深い関連性を窺わせる。また、兄の二つの論文の執筆時期は、先述した「草深し」の内容になつている一九三六年から一九三七年までの時期とびつたり符合している。つまり、「草深し」は兄が二つの論文を書き、その論文に書かれたような仕事と演説をしている時のことが描かれているのである。評伝によると、金史良は兄を尊敬し自慢していたし、また金時明もそれに答えるくらい聡明で、有能な官吏であつたという。しかし、植民地政策の構造の中に入っている彼としては、結局は作品の叔父のように滑稽を演じざるをえなかつたと思われる。

もう一つ注目したいのは、仁植の火田民の調査が農村啓蒙運動の一環として行われたことを示す箇所である。

それに同じく大学に籍をおく他の学友達は、既にもう両斧山の火田民集団地区に着いて各々の分担に従ひ山民経済や、宗教信仰、解字程度、疾病状態等の調査に掛つてゐる筈なのだ。何しろその頃は大学生を始め中学生に至るまで、悉く若々しい情熱を抱いて夏休みを利用して、農村へ漁村へ山間へと入り込んで行つた時代である。夜学を開いて文盲に光を与へるため、又はくまなくその生活を調べて、彼等と呼吸を等しくするために。

また、仁植と鼻かみ先生との会話の中には、それがさらにそれがはっきり示されている。

「はあ、山を歩くのが好きでして」

「成程、若い人達は元気があることで。あなたもやはりブナルードにですかな。……だが、何より体を大事にして下さいよ」

農村啓蒙運動というのは、農民や漁民の文字教育を中心に、衛生、音楽、演劇などの指導を通じて民族意識を高揚する意図でなされたもので、一九二九年朝鮮日報の文字普及運動から始まり、一年の東亜日報のブナルード運動（三三年には啓蒙運動に改称）によってさらに拡大され、総督府が中止命令を出す一九三五年まで全国的に盛んに行われた⁽²²⁾。ちょうどこの時期は金史良の佐賀高等学校の在学時期と重なり、彼もこういう農村啓蒙運動に何らかのかたちで参加したと推測される。先行論によると、金史良は佐賀高等学校一年の時には少年向けの童話や童謡を主として発表した⁽²³⁾が、二年次になってからは「全く別の面」をみせたという⁽²³⁾。二年次の「山寺吟」（朝鮮日報）と三年次の「山谷の手帳」（東亜日報）という作品がそれである。これらが書かれた時期は農村啓蒙運動がもっと

も盛んな時代で、朝鮮日報、東亜日報もそのような意味あいでの彼の作品を掲載したであろう。また「山谷の手帳」には、「見聞に基づく社会批判」の精神が貫かれていて(24)、「草深し」で見られるような火田民の惨状についても細かな観察が確認できる。今までの金史良像は反抗のイメージばかりが強かったが、農村啓蒙に携わるなど、現実に積極的に働きかけるしたたかな精神も合わせ持っていたといえる。

そして、いよいよ作品の後半部には、主人公の△仁植▽が山奥で直面する火田民の悲惨さと、その火田民を食い物にしている白々教の実態が明らかになる。火田民と白々教の密着ぶりについては、

一隅には硯箱がおかれその傍らには、先ほど火田民の家の壁で見たのと同じやうな墨字で書き散らした奇妙な呪符が一杯重ねられてゐる。この二人が無知な彼等にその呪符を売つては喰つてゐたんだと彼は考へた。瞬間不安な気持ちで顔を曇らせた。

これらの行為が白々教によるものであったということは、作品の追記の部分で明らかになるが、まず本文中の呪符のことを白々教事件から探ってみよう。白々教事件発覚後の毎日新報には、「一枚百円、五十円ずつ」「弓弓乙乙、眩惑用怪印」という見出しで、「速からず朝鮮には、三十尺に達する洪水があつて皆溺死するが、献金をする教徒だけは、金剛山の避身宮に逃れられ命が助かる」と献金を強要した事実を紹介している(25)。また、将来朝鮮の独立の日には、王様になる教主が、「その現金の程度によって官職を与えると云つて、呪符一枚五十円、百円で売つたが、その呪符には弓弓乙乙型の印と花模様白白教印を押して」あつたという。「弓弓乙乙」は『鄭鑑録』などの朝鮮末期の予言書に出ている言葉で、後に東学党に取り入れられ、東学軍の旗や護身符として広く使われたものである(26)。これが東学党の敗残の後、東学の類似宗教に引き継がれるかたちで白々教にも取り入れられたであろう。

こういう火田民と呪符の関係は、以前の「山谷の手帳」にも見られる。「山谷の手帳」には、「崩れかかった壁には二三の瓢箪と奇怪な呪符が貼つてあつた」という「草深し」同様の表現があり、また、仁植の訪問に逃げまどう火田民とその子供の光景を描いた似たような場面がある。

その女兒は、赤ん坊を背負つて逃げまどいながら、「お母さんー」と喚き泣いた。土黄色の裳をかけた五十位の老婆が驚いて慌てふためいていた(27)。

「山谷の手帳」での呪符が白々教によるものかどうかは確認できないが、「草深し」を書く際、白々教事件との関連のうえ、以前火田民の家で発見した呪符を白々教によるものとして構成したのであろう。

続いて、作品には信者の言葉を借りて、白々教を信ずれば、無病無災、不老不死の神仙になるという記述がよく出ている。

「さうですよ、わしらの大先生の教へを信ずれば、近い中に水の審判があつて、世の衆生が皆水に溺れて死んでも、わしらだけは金剛山の避水宮に導かれて神仙になるんですよ。火の審判もやがてありますよ」

あるいは、

「だからこの近在の山の人々はな、この方を神仙と拜んでるんですがすな。お祈りで病氣は治して貰へるんだし、それに有難いことに熱心な信者にはこれから食べねえでも生きてゆくやうな秘法を教へるさうでがして、（中略）」

神仙になるということは、来世極樂よりもこの地上に極樂の建設を標榜した東学教とその類似宗教に共通する特色である。これは白々教とその前身である白道教にも強く現れているもので、前教主全延芸が死んだ時には、この神仙思想を裏付けるため、

全延芸が死んだ事実が教徒に知られると、不老長寿して神仙になれる白道教の教旨が矛盾し、教徒の信用を失って同教が壊れることを恐れ、全延芸が死んだ事実を隠して真夜中に死体を暗葬した後、全延芸が今も生きているように偽って教務を専行してきた。(28)

といったような工作をしている。同じく白々教公判の論告文には、

彼（全延芸）は、いわゆる儒教・仏教・仙教を混合した東学の教義に従い修行の結果得道し、神明によって白白白衣衣赤赤赤赤という呪文を授けたという。そして、この呪文さえ唱えれば無病無災、不老長寿し、ついに神仙になれると説教し、この教こそ教人命元大道と言って布教に勤めた。

といったように、無病無災、不老不死、神仙というシステムが繰り返して強調されている。また、火や水による審判、避水宮としての金剛山の概念も白々教がよく

使う言葉で、判決文にも同様な記述が出ている。これからも『草深し』が白々教事件とその公判記録に強く影響されたことがわかる。

一方、白々教のもっとも特徴的なところは、白衣に対する異様なこだわりである。この白衣に対する白々教の態度が、前半部の主なテーマになっている。総督府の色衣奨励と衝突することになる。

「わしら白い着物を着る朝鮮同胞はどうしても鄭鑑録にたよらねば救はれんのでしてな。ちやんとその中に白衣同胞の進むべきみちや運命が予言してあるのですよ」

「鄭鑑録？」

「けけけ、六ヶ敷いこたありませんよ。白い着物を着て××××××××××と唱へれば、それで救はれるとちやんと鄭鑑録に書いてますからな、けけけ・・・・・」(中略)この男達は朝鮮人は白衣を脱いで救はれぬといふ教義であるのかも知れない。

本文中の九つの×印は、白白白衣赤赤赤という呪文のことであるが、引用文とその呪文からも白白教が白衣に非常にこだわっていたことがわかる。それは「全延芸はいつも白赤色(確認できないが白を目立たせるための赤を混ぜた白)の衣を着て」いたことよってさらに裏付けられる(29)。当時の記録には白々教と白衣についての記述はあまり見あたらないが、それは白衣を禁止する総督府の色衣奨励政策もあり、抗日の意味あいでも誤解されることを避けるためであったと思われる。白々教による白衣の強調は、それ自体が総督府の色衣奨励政策の批判になり、白衣を固守しようとする民衆を説得するには非常に都合がよかったと思われる。もちろん、これはあくまでも、白々教犯罪の巧みな犯罪の一面で、他の類似宗教に共通するものではない。同じく東学系類似宗教である水雲教(東学の教祖崔濟愚の号が水雲である)は、「昨今当局の自力更生運動に順応し、色衣普及の実行」云々といつて、白々教とは全く違う姿勢をとっている。また東学のおもな傍系宗教の一つである普天教の場合も、色衣奨励に対し「既に教義に依って青服を着用して居るが、これ我が教が先見の明のあるところ、他教に優れる処である」と言ったような呆れるばかりの態度を示しているからである(30)。

一方、作品での仁植は、白々教の実態やその餌食になっっている火田民の悲惨と彼らの狂気に満ちた異様な行動を目撃し、朝鮮の現実に対するやるせない怒りと絶望を感じて火田民の調査を終えることになる。

「燃えろ、凡てを焼き尽くせ」

と仁植は気でもふれたやうに目を輝かせながらひとり言を叫んでゐた。

「さうだ、すべてを煙に……」

そして、作品は後日の追記の形になり、「その後月日は既に三四年を過ぎ」た時点で語られる。そんなある日、△仁植▽は「都から配達された雑誌」の中から「白々教の公判記録」を読み、行方不明になった鼻かみ先生が白々教徒に殺害されたのではないかと推測する。そこで白々教事件の全貌が始めて紹介されることになる。

それはその魔教の幹部連中が哀れな百姓や山民達を欺いて、血と汗に依る彼等の財産や食料を奪つたばかりでなく、その妻や娘までをも強奪し、つひには自分達に従はぬ者を三百十四名も殺害したといふ事実である。かういふ戦慄すべき事件が現在の自分達の住んでゐる朝鮮でよくもあり得たではないか。それに何しろ昭和十二年以降四年間、無慮百九回に亘り全鮮各分所で行はれたといふこんな怖ろしい殺人が、未だに司直の手をもつてどうして発かれなかつたのだろうか。全く暗然とせざるを得なかつた。

本文中の犯罪記録はいずれも論告文によるものである。そして、このような白々教事件は、その犯罪の性質上、また植民地時代ということもあって、朝鮮の民衆に大きな衝撃と絶望を与えた。朝鮮には自治能力がないという支配者の論理を正当化し兼ねない憂慮があったからである。当時の毎日新報では「民衆の覚醒が切緊」という見出しで、民衆の覚醒を要求している(32)。また、犯罪当初の『朝光』の白々教事件特集では、「時代を無視した残虐な大犯罪が長い間にかけて継続的に演出した温床としての現代朝鮮の一般的な社会実状」について強い憂慮が示されていた(32)。その憂慮の一端が後の公判論告文の中で、日本側によって厳しく指摘されることになったのである。

昭和聖代において一大汚辱であり、また、犯罪史上から見ても空前絶後のことで、外から見て、一体朝鮮に治安が維持されているかどうか疑わざるを得なく、さらにこの事件の内容が天日の下に暴露されてから、朝鮮の二千万民衆の評価を甚だ低くし、未だに朝鮮民衆は太古のような文化程度にあるのではないかと批判される恐れがある。(33)

この判決文を読んだ筈の金史良は、朝鮮の現実に対する強い絶望感を感じたであろう。故郷と朝鮮のことについて並々ならぬ愛情を示してきたからこそ、愚か

な民衆とそれを巻き込む大犯罪が横行する朝鮮の現実に対する絶望感はおさら大きいものであったろう。「草深し」は、そういう愛情と絶望が交錯するいたたまれない内面風景を即座に作品化したものである。この公判記録から「草深し」の発表まで、ほとんど一箇月余りしかかからなかったことから、白々教事件が金史良に与えた影響のほどが推測できる。

以上、みてきたように、「草深し」は、一九四〇年五月に発表された朝鮮語雑誌『朝光』五月号の白々教事件特集の論告文に大きく刺激されて書かれたものである。そして、作品を登山を前後にして前半部と後半部に分けて考察した場合、前半部では総督府の色衣奨励に対する強い批判が窺われるが、登山以後の後半部になると、白々教事件が大きな主題になり、悲惨な火田民の実態やそれを食い物にする白々教への憤懣、さらにそのような残酷な殺人集団がはびこる朝鮮の現実に対する嘆きが話の中心になっていく。そして「草深し」全体としては、単に「総督府の色衣奨励への痛烈な批判」に終わったものではなく(34)、朝鮮内部の現実にも厳しい視線が投げかけられているといえる。一方では植民地支配から来るさまざまな矛盾、もう一方では無知蒙昧な民衆と残酷極まる妖しい宗教がはびこる朝鮮的現実が何一つ誇張されずに描かれているのである。外部と内部に気の遠くなるようなさまざまな問題を背負っている朝鮮の現実、まさにその題目どおり、先行きの見えない「草深し」の世界といえよう。金史良は、「草深し」のなかで、そういう朝鮮の現実を何一つ隠さず、冷静な目で描いているが、この矛盾の中にこそ金史良文学の大きな苦悩があったのではなからうか。

以下、「草深し」に見られる白々教事件が、金史良文学にどういう具体的な影を落としたか、白々教事件前後の作品からその変化の過程を辿ってみよう。

4 「草深し」前後作と白々教事件

東学系類似宗教のことが金史良文学に最初に登場するのは、佐賀高等学校二年次(一九三四年)に書いた「山寺吟」である。この作品は「以前の少年向けの童話や童詩を主として発表した」世界から脱皮し、金史良の本格的な散文作家としての出発をなす作品と言われている(35)。そして、その冒頭には東学類似宗教の一つである上帝教についての記述が見られる。

(前略)(大宝山は、筆者注)裾がふっくらした円やかな山で、上帝教の暢気な村の老人達は、峰の数が一つ少ないので、鄭道令が鷄龍山(峰が百があると言われている、筆者注)に都邑処を移してしまったことを非常に残念がるほど、多くの峰を持っている。(36)

また大宝山の山容をいうところには、「その実、論山平野から見る鷓鴣連峰を、平壤平野から縮小して見るように」といったように、東学教と密接な関連のある表現が見られる。しかし、作品全体はあくまでもロマンスに満ちた青春の一場面を描いたもので、類似宗教への陰鬱な描写はあまりなされていない。上帝教が一つの周辺の素材として登場しているだけである。上帝教に関する記述は、「山寺吟」と同じく佐賀高等学校二年次に書き、後の一九三六年『堤防』二号に発表された「土城廊」の中からも見受けられる(38)。

「土城廊」は平壤郊外の貧民窟である土城廊で暮らす浮浪労働者たちの悲惨な生活を描いたものである。故郷を追われて、支械(チゲ)軍の仕事をしているそれぞれの登場人物を通じて「朝鮮の民衆像が強烈に活写され」ているが(39)、その支械軍の中に吃男の上帝教信者が出てくる。彼は日清戦争で家族と兄弟が殺され、彼自身は密酒をしたというかどで長い間留置され、その罰金を払うため、牛と家財道具を売り払って土城廊に流れてきた人である。いわば植民地政策のもっとも犠牲者といえる人物で、その吃男の上帝教信者の口を借りて植民地政策の矛盾が強く提示されている。

「わ、わしの飯で酒を作つただ。わつしあこの通り罪のねえ人間だ・・・餓鬼の時から一生懸命働えて来た・・・わ、わつしあ、これでも立派な百姓だ・・・(中略)

「ど、どうかしてるだと、どうかしてるだとも、え、どうかしてねえでゐ、ゐられるかよ」

というように、植民地政策の矛盾が痛烈に批判されている。そして、作品には彼が信じている上帝教についての細かい描写が見られる。

例の吃男は踞坐して何か奇妙な呪文をぶつぶつ唱へてゐるばかり、返事もくれぬのだ。爺が吃男の土幕の中を覗いたのはそれが始めてだった。薄暗い所に石油箱の祭壇がおかれ、その上に清水の器をおいてゐた。彼は今尚、上帝教の信者だった。かうして上帝の霊に触れ、今に地上天国が建設されればその時こそ自分には厚授あるものと信じてゐた。

「お前さん、何してるだよ」

「叫哆叫哆太乙天上元君・・・」吃男は依然として奇妙な呪言を止めなかつた。

上帝教は一九二五年、東学教第二世教主催時亨の直弟金演局が侍天教から分離

して創始したものである。彼は梁山通道寺奥の千聖山に入山して瞑想修道するうち、上帝から紅書一冊を授けられ、世界万国の宗教は上帝に基づくものと大いに悟り、忠清南道鷄龍山新都内にその本部を置いたのがその始まりだという。その教理の基本は、東学教時代の教理やそれ以降の天道教とほぼ同じであるが、細かい違いとして「天道教では祈禱礼拝に際し、清水を供へるのみにて神位を設けないが、上帝教では恒常祠堂（天壇）の設けあり其処に神位を安置」したという（㉔）。その模様は本文中からも窺える。また、本文中の「厚授」があるという表現は、当時の東学類似宗教に幅広く見られる募金活動の常套的な手段の一つである。植民地時代の悲惨さから逃れようとする民衆の心理を旨く利用して、民衆から金を巻き上げたのである。それは白々教においても同じである。

一方、本文中には上帝教の呪文が出てくるが、そこには、一つの誤りが認められる。本文の「叫哆叫哆太乙天上元君」に始まる呪文は、上帝教の呪文ではなく、東学のもう一つの傍系である甌山教系の呪文なのである。甌山教は一九〇四年頃姜一淳（号が甌山）によって始められた類似宗教で、東学系類似宗教と区分して叫哆系類似宗教と言われている。その呪文が、「叫哆叫哆太乙天上元君・・・」と始まるから、一般的に略して叫哆教、または太乙教とも言われ、その呪文のことは太乙神呪、または如意呪ともいう。この太乙神呪は、東学教時代からの呪文である侍天呪に甌山教主姜一淳が新しく作り加えた呪文で、おもに叫哆系類似宗教によって広く用いられた。その呪文は「叫哆叫哆太乙天上元君叫哆哪都来叫哩喊哩娑婆阿」というようなもので、本文からもその一部が見受けられる。しかし、本文の上帝教は東学教系であるから、太乙神呪ではなく、侍天呪（「至氣今至願為大降、侍天主造化定永世不忘万事知」）を唱えたはずである。叫哆系類似宗教が上帝を重んじて、上帝という言葉をよく使うことから、作者はこの呪文のことを上帝教のものと勘違いしたのではないかと思われる。

さらに、本文（『文芸首都』一九四〇年二月）では、「叫哆叫哆」と書かれるべきところが「叫哆叫哆」になっており、これが全集では「哇哆哇哆」に変わっている。これらの誤植は、後の作品集にもそのまま引き継がれ、北朝鮮の翻訳版やそれを本にした韓国版では、この誤植の部分がそのまま朝鮮語音読みになって全く間違った形をとっている。一つの事実として指摘しておく。

以上、佐賀高等学校二年次の作品に現れた東学系類似宗教を見てきたが、金史良の類似宗教への興味は、金史良文学出発と同時期に、上帝教から始まっていることがわかる。しかし、彼のこの時期の東学系類似宗教への認識は、後の「草深し」とそれ以降の作品に見られるような激しい批判は見当たらない。「山谷の手帳」では田舎の閑閑な風景描写の素材として取り入れており、「土城廊」の上帝教信者の吃男を通して、植民地の悲惨さを告発し、植民地政策に対する厳しい

批判のかたちで取り入れられている。類似宗教への批判より、むしろ信者である吃男への厚い同情が見受けられる。こういう類似宗教への好意的な認識は、白々教事件がまだ発覚される以前ということで、金史良もその正体がよくわからなかったからであろう。しかし、白々教事件が明るみに出てまもなく書かれた「草深し」になると、その態度は判然と変わる。一九三七年二月に発覚した白々教事件は、類似宗教への好意的イメージから急転換し、嫌悪と怒りの感情を深めていくきっかけになるのである。そういう嫌悪と怒りを最も露にしたのが、白々教事件の公判に刺激されて書かれた「草深し」である。「草深し」では白々教についての具体的な記述と、作者の感想の形でさらなる激しい批判がなされていることから、金史良の怒りのほどをよく推測させる。こういう白々教事件を通して類似宗教への嫌悪と批判は東学教やその系列の類似宗教全体へ広がり、以降の作品にもその影を落とすことになる。その影が明確に現れているのが長編小説「太白山脈」である。

「太白山脈」は、朝鮮の御用雑誌『国民文学』に一九四三年二月号から十月号にかけて連載された長編小説である。その内容は太白山脈の山奥の火田民村を背景にして、甲申政変に敗れて逃れてきた尹天一父子が火田民を理想郷に導く過程の苦難の話が描かれている。そして、その苦難の中心部分をなしているのが東学教徒との確執で、作品では東学教徒は太白山脈の山中に分教所まで建てて呪符と呪文、予言などで火田民をたぶらかし、金銭と処女供養を強要する集団として描かれている。主人公の尹天一が最初に邪教の存在と対面するところを見ると、

彼は中の方で奇怪な呪文を唱へてゐる聞き覚えぬ男達の声を耳にして、いよいよあの憎むべき魔教の連中が乗り込んで来たなと思つた。その戸口の方を見やると、壁に黒字で書いた次のやうな呪符がはりつけてある。(呪符の絵と本文一部省略)その当時は妖書「鄭鑑録」のたわいない予言を利用して簇生したいろいろな邪教が、可憐不遇な農民村の中に魔手を伸ばして、政府は今に倒れ、教主が登極して政治をとるやうになる、その暁は教徒達にも厚授あるものと愚昧な民衆をたぶらかしてゐた。しかも教の目的成るの日までには、必ずこの地上に水乱と火乱に厄が現はれる故に、今の中教主の指図に従つて江原道は金剛山の麓に集まらねば生命と財産も全うし得ないと云つて、無智な教徒達を太白山脈へと追ひたてた。

というふうには、東学の性格が白々教と性格とほぼ同じように描かれている。水乱と火乱、教主の登極際の厚授と避身宮としての金剛山などの概念は、「近い将来に火の審判、水の審判」があり、「教徒は献金、手腕、信仰の程度によって官爵

が与えられ」安楽な生活が得られるという白々教の犯罪記録と全く重なっている(41)。また、農民を地方の分教所に火田民として住まわせたことや、容貌の綺麗な信者の娘を侍女として献上させ、教主の妾にしたことなども白々教事件そのままである。さらに分教所からきた三人の教徒達が皆「白いものを着込ん」でいること、農民を襲って「何でもかでも掠奪するだし、女は強奪する、男達は打ち殺す」といったところも白々教事件の影響であろう。

このように、「太白山脈」では東学教を描く際には、白々教事件の影がつよく投影され、東学のイメージはほとんど否定的に描かれている。そのため、作品の時代背景になっている一八八六年頃の東学の像は、実際のそれとは全く懸け離れている(42)。一八八六年頃の東学は、草創期の健全で穏やかな救民思想と改革思想を唱えていて、貧しい農民層に急激に受け入れられた時期であった。またこの時期は、一八八七年に接所(東学の布教所)を設置し始めてから、本格的な実力行使をする一八九二年の教祖仲寛運動や一八九四年の東学農民運動にいたる過渡期で、民衆はまだ東学に対して穏やかな希望を抱いていた。本文のような悪事を働く集団としては、農民の支持を得るはずもなく、実際にもそうではなかった。さらに本文中には、「東学の流れを汲むと称する教徒」や「東学を名乗る邪教」という表現がよく出ているが、「東学の流れを汲む」邪教や類似宗教の誕生は東学農民運動が失敗した後のことで、この時期にはまだ存在しなかった。ほかに、東学に対する細かい描写には後代の類似宗教、つまり白々教の影が強く投影されている。

一方、本文では、東学が勃興した歴史的背景や教祖崔濟愚の思想についてふれた箇所があるが、そこでは、「世を救ひ、民を安んじ、奸権を除かねばならぬ」といったように、その思想を高く評価しながらも、結局は「又無頼の徒はこの教を悪用して、山間に或は田村に入り、愚昧な民衆を籠絡し、無慙至極にもその生活を蹂躪」した、という認識に至っている。主人公尹天一が東学教徒と一戦を交えるのも、東学のこういう誇張された否定的な一面からである。しかし、本文でなされている邪教への批判は、東学の流れを組む類似宗教に限られており、伝統的な民間信仰や山神信仰には全くなされてない。主人公尹天一が山神に祈って将来の導きを乞うことや、新天地に着いて山の神に祝福の祈りをあげる場面からわかるように、在来宗教は非常に好意的に描かれている。これらの在来宗教は、邪教に対抗し、新天地と新国家思想を支える精神の拠所としての性格さえ持っている。このような伝統的な在来宗教や迷信への好意的な描き方は、「山の神々」にもそのまま窺えることから、金史良の類似宗教への嫌悪感は、あくまでも東学系類似宗教に限られたものであるといえる。それほど白々教事件の衝撃は大きかったであろう。

しかし、作品の終わり近くで、月精寺の老僧と出会う場面から東学への認識は急に変化をきたす。老僧から東学の政治的な意義を論されたからである。老僧によって語られる東学のイメージは、今までのような邪教的な面ではなく、国家建設の指導的な面であった。

「老婆心から、拙僧もう一つ注意したいことがある。学者の日童様がゐるから、あの東学のこともよく知らうのう。東学党こそ今この国における最大の力ぢや。各地に目を追ふてさかる民擾、それも凡て官府の暴虐に反抗せる乱民を、東学が蔭で指導してゐる。これが今に一大勢力となつて、この国の政治を動かす時が必ず来るであらう。それに目をつけるがいい。これともよく結んで力を合せ、国家改革の発砲とすべきぢやぞ。（後略）」

作品の流れからみると、ほとんど唐突といえる新しい東学のイメージである。今までの呪術面だけが強調された描かれた否定的な東学のイメージに、政治的な力という肯定的な一面が加わったのである。作品でこのように東学へのイメージの変化は、作品の後半の終わり近くになって、しかも唐突なかたちでなされており、作品構造上の疑問さえ抱かせる。東学の邪教性ばかりを強調したその以前とは違って、いきなり政治的な力を評価するなど、肯定的にそのイメージが急変しているからである。このような東学のイメージについての急変は、この時点において金史良の東学認識に大きな変化があったことを示すものである。長い時間を要求し、また読者の反応にも気をつかう新聞連載小説の性格もあって、作品の終わり近くになってからやっと白々教事件初期の衝撃から冷静さを取り戻し、以前の東学のイメージに修正を加えざるを得なかったと思われる。その結果、作品全体において東学イメージの不統一という作品構造上の問題を残すことになったと思われる。そして、その変化した東学像の模様は後の長編連載小説「海への歌」からも窺うことができる。

「海への歌」は、朝鮮の『毎日新報』に一九四三年十二月から一九四四年十月までに連載された長編小説である。内容は申別将一家の約一世紀にわたる苦難の話で、アメリカのシャーマン号進入事件から、東学農民戦争、日韓合併と満州事変、日中戦争を経て太平洋戦争に至るまでの広大な歴史的なドラマが申別将一家の三代にわたって繰り広げられている。しかし、その内容は、日本の朝鮮統治を一方的に肯定するもので、日本統治を賛美し合理化する姿勢で貫かれている。そのため、登場人物の性格は統一されておらず、しばしば分裂を起こして作品自体も破綻しているように思われる。たとえば、主人公の申別将は、外国侵略勢力と戦うことに命を惜しまぬ人物で、シャーマン号侵入の時には国を守るため大活躍をす

るが、江華島条約につづく日本の侵略に対しては、いつの間にか肯定的に受け入れられる。そして日清戦争になると、今度は「大東亜」が力をあわせて「洋鬼子」を退くことを力説しながら、いきなり日本軍と協力して清国と戦ったりする。また日韓合併のところでは、「いよいよ朝鮮は日本と一体になり、東洋における指導者の地位にのし上がると同時に、その神聖なる使命の一端を敢然として担う」とになったと評価し、日韓合併をきっかけに、「わしたち東洋人はまだまだ真赤な血を流さずばなるまい」と、作品の中でも全く論理性が欠けた発言をさせている。ほかにも大院君が率いた兵によって閔妃が殺害され、柳条溝事件は「中国兵の陰謀によって惹き起こされた」などといったように、作品の随所に無理矢理の皇国史観に基づいた表現が数多くある。

「海への道」の内容から考察する限り、今まで金史良を高く評価する材料としてよく引用される「太白山脈」に対する、林鐘国の『親日文学論』での次のような評価とは、はなはだ矛盾している。

底に流れる郷土にたいする強い感情。だが、ただそれだけである。なまの形の時局的説教もないし、道化じみた日本精神の宣伝もみえない。だから、この長編はたとえ日本語で書かれたにしても、ただちに親日文学であるときめつけるのは困難である。ただ、主人公が金玉均一派だということが、評者によってどう解釈されるだろうか。むしろ、日本統治末葉に、こうした素材なりスタイルの国語作品も存在しえたことを、ひたすら時局的な発言を事とし、日本精神の宣伝にのみ汲々としていた作家たちと対比して、よい実例としてあげるのが適当であるかもしれない作品である。(43)

「こういう素材なりスタイル」というのは、時局的な問題からある程度自由になり得る歴史的な素材をいうのであろう。同時代を扱えばどうしても時局を避けては通れないところがあるからである。林鐘国が「太白山脈」を「よい実例」として評価したのは、「日本精神の宣伝に汲々」しなくて済む方法が、こういう歴史的な素材の選択から可能であったことを証明したかったからであろう。似たような指摘は、当時の評論からも窺える。

現下の先鋭な時局的神経に触れないで、割合に今日の問題に触れ得るのは、歴史文学である。しかし、これも今までの所、趙容萬の「船の中」より以外、これと云つたものは現はれてゐないが、今云つた通り、これは割合楽な途であるから、これからはほとんど現はれて来ることと思ふ。日清、日露の両役を背景にした、金玉均、朴泳孝などの活躍から取材すれば、雄大な長編もいくつかは

出来上がりさうである。(44)

以上の二つの指摘から、歴史小説という素材は「日本精神の宣伝に汲々」することなく、「時局的神経に触れない」で書ける「割合楽な途」であったと言える。まさにそういう素材選択の問題として林鐘国は「太白山脈」を「よい実例」として高く評価したのである。しかし、「海への歌」はこういう可能性を全く裏切るかたちでなされた作品である。「太白山脈」と同じ時代背景と人物設定で書かれたこの小説は、林鐘国の評価とは逆に、徹底的に時局的な内容として「日本精神の宣伝に汲々」しているからである。「時局的神経に触れない」で「割合楽」に書ける素材でありながら、時局的な内容で塗りつぶされていることを考えると、林鐘国が「よい実例」としてあげた評価は甚だ疑わざるを得ない。「海への歌」と「太白山脈」との作品構造や時代、また人物設定においての類似性を考えると、「太白山脈」の中断された第二部がどういふふう展開するかは「海への歌」からも充分推測できるからであろう。

ここで一つの問題として提示しておきたいのは、親日文学の解釈をめぐるものである。それは従来なされた通り、何を言い、どういうことを考え、どういう行動を取ったかを詮索するものではなく、どういう形で表現したかに重点を置いて論じなければならないということである。つまり、親日と親日文学は別の次元の問題で、また、たとえ作家の表現といっても、それをそのまま作家思想の対象として全面的に論じるのは非常に危険であるということである。とくに強制的な側面が強い朝鮮人作家の親日文学を論じる時には、作家が自分の文学意識とは関係なく、一種の義務として表現していることが多いからである。ここで、一つ判断の基準として考えられるのが、作品において作家の想像性、または作品と作家、あるいは読者との密着性の度合いの問題である。たとえば、強制度の強い時局演説や随筆、軍視察のルポなどは、作者の想像性が抹殺された、個性のない千編一律的なもので、そこには作者、作品、読者との密着の度合いも非常に薄いことから、親日文学として断じるのはあまりにも危険である。また、詩や小説の場合も、日韓融合と出征を千編一律的に唱える個性のない作品は、それ自体が一つの宣戦ポスターに近いものになり、文学作品として全面的に取り上げて作家の国策の度合い論じていくのは、慎重を要するべきである。親日文学を論じる時には、そこに書かれている言葉ではなく、作品に関わる作家との密着性や想像性を重視する必要がある。その意味で、「海への歌」は、宣伝ポスターに近い氏の「海軍行」や、林鐘国の『親日文学論』で上げられる多くの国策的な言説とは性格を全く異にしているといえる。この作品は、他の親日文学と言われる作品にはあまり見かけられない作者の豊かな創造性と読者との強烈的な密着の度合いまで感じられ

ることから、親日・国策文学の類型の中でもあまり類例がないものように思われる。今までの金史良論はこういう面はほとんど看過され、芥川賞による日本文壇への華々しい登場や、延安抗日地区への脱出と朝鮮戦争への人民軍としての従軍と戦死が、彼の文学思想の揺るぎない根拠として、一つの神話的な像を造り上げるまでになったのである。その結果、以前の親日的な言説といえる「海軍行」「ナルパラム」などの作品や、国策文学においても重大な意味をもつ「海への歌」でさえも、全く無視されるか、あるいは延安脱出のための偽装転向というかたちで解釈されるまでに至ったのである。こういう政治的な結果からの類推は、かえって金史良文学をタブー化するかたちで、その像を曖昧にし、また、親日文学を論じる際にも甚だ不公平な結果をもたらしたのである。たとえば、林鐘国の『親日文学』では、李石薫（創氏名、牧洋）の「善霊」（『国民文学』1944.5）を取り上げ、親日文学者の自画像である主人公が、国策について大きく動揺していることを指摘し、その理由として、

この答えは、この作品の著作年代が説明してくれる。四四年五月、『国民文学』に発表した「善霊」は、すでに理性を失ってしまった親日派たちの自画像であった。アツツ島玉砕という深まりゆく敗戦の陰影に、かれの神経はいらだっていた。かれがあゆんできた道について、自己嫌悪にとらわれ、また、かれらが関係した団体について懐疑をいだきだしたのであった。（45）

と、主人公の国策に対する積極的でない態度と懐疑を、戦局の不利による時代的な状況から考察して批判している。戦局の不利から主人公の朴泰民は、「どこへいけばこの身が安全だろうか」と思い、「満州へ逃げだしてしまった」と指摘する。こういう戦局の論理からすれば、牧洋（李石薫）の「善霊」が発表された四四年五月（付記によると三月完成）からさらに半年以上も経った時点の、四四年十月初旬までに書き継がれた「海への歌」では、牧洋（李石薫）の自画像である朴泰民のような懐疑さえ見せていないことになる。さらに、金史良文学の中でも特筆すべき延安抗日地区への脱出がなされたのは、四五年五月の終わり頃で、すでにこの時期なると硫黄島守備隊の全滅、東京大空襲、米軍の沖縄上陸、ドイツの降伏がなされ、東京帝国大学でドイツ文学を専行した金史良が日本の敗戦を予測するのは、そう難しくはなかったと思われる。彼が延安の抗日地区に脱出したのは、まさにこのような敗戦間近で、となると、林鐘国が牧洋を批判した時局不利の論理は、その表面的な状況から見るかぎり、金史良により当てはまるのである。しかし、従来の金史良論は、抗日地区への脱出という政治的な結果が先走り、朝鮮文壇のほとんどの親日文学者や日本で活躍した張赫宙とを比較して批判する

材料として、その像は作品を離れて大きく肥大化した感を否めない。韓国の評論家金允植が、金史良文学の神話を「いわゆる新日本文学会側の愚像」として、また「進歩的な日本文人側と在日朝鮮人一世」の共通した「自己同一視化」の対象として、さらに日本語の創作においての「在日一世たちの最後の拠点確保の試練」の問題として把握したのは、まさにこの点を指摘してのことであろう(46)。

さて、本論にもどって引きつづき、作品に描かれた東学の性格を考察してみることが、「海への歌」がもつ以上のような国策的な要素は、そこに描かれた東学の性格にもそのまま影響しているように思われる。作品では東学に関わっている中心的な登場人物たちが、東学の歴史的な背景を長く説明した部分がある。

こうした社会の動向を象徴するうってつけの事件が、いわば東学の乱であった。さらにいえば東学の乱こそはまことにこの国の歴史はじまって以来の、大規模な動乱と呼ぶにふさわしいものであった。そしてこれは、いまや耐えるだけ耐え、忍ぶだけ忍び、もうこれ以上は後へ退くことができぬという逆境にあって、虐政のもとで呻吟をつづけた民衆が、いっせいに武器を手にして立ち上がった点でも、希有のできごとといえた。

以前の作品にみられるような民衆をたぶらかす邪教的な東学への認識はなくなり、民衆が虐政に抵抗して立ち上がったものとして、東学の歴史的な意味が高く評価されている。しかし、虐政に立ち向かう民衆の志は高く評価しながらも、その運動時期の間違いについては、次のように批判している。

国を建て直そうとした東学軍の志と情熱は、立派といえるものであった。しかし、それにしても哀しむべきことであった。彼らに時勢と世界の情勢を展望するだけの力がこれっぽっちもなかったとは。

「太白山脈」では、東学を政治的な力という肯定的な面と民衆を眩惑する邪教という否定的な面に分けていたが、ここでは、「太白山脈」でみられたような東学の邪教的なイメージは、全く抜け落ちている。そして、作品のおもな登場人物たちもこうした変化した東学のイメージの中で設定されている。国を守るために申別将と契りを結んだ三人の友人の中の一人であるベコビが、東学軍に加わったことを聞いた申別将は、「国の政治を立て直そうとする行為が、かえってこの国を滅亡の深淵に追いやる」と言って、「絶句し、体をわなわな震わせ」る憤懣を露にするのである。東学が時期を間違ったことに対する批判のかたちで、主人公の申別将は村の人を連れて平壤城の戦いに参加し、日本軍の味方になって清国軍

を退けるのである。

一方、もう一人の友人弥勒も、申別将と同じ理由で、東学軍に加わったベコビと一戦を交え、最後にはベコビの死を見届けることになる。その後、弥勒は国を守るという理由で日清戦争の時には日本軍に従軍し、勝利の喇叭と万歳の声を聞きながら壮烈な死を遂げることになる。さらに、東学軍に参加したベコビは清国軍が出兵した事実を聞いて、死ぬ間際には東学軍に加担した自身の非を全面的に認め、「民衆の刃」による死を願う。民衆のために、民衆を味方にして戦ったベコビが、どのような理由で民衆の刃による死を願わなければならないのか、その心理的過程のことはほとんど説明されていない。単に東学が時期を間違ったことと、国を守るため清国と戦わず日本軍と戦ったことが「一代の不覚」で、それが死に値するというふうを描かれている。

このように、作品では、「太白山脈」以来の白々教の影から抜け出て、東学のもつ本来の歴史的な評価を試みてはいるが、その評価はごく限られた部分でしかなされていない。東学の歴史的な意義をあまりも強調すると、東学が外国の勢力を排除しようと日本軍と戦っていることから、その評価は国策に反するものになるからであろう。つまり、東学を評価しないのが、あるいはそれを否定するのが、日本から要求されるより国策的なものである。ここで大きな葛藤と矛盾が生じてくる。それは東学を評価したい内部の一面と、東学を評価してはいけない外部からの力による葛藤で、それが結果として、東学を評価しながらもまたそれを否定する矛盾に到らしめたと思われる。以前の白々教事件から冷静にもどり、東学に対する新たな評価を試みようとした時点では、すでに国策によって東学への評価が不可能になっていたのである。そのような作家の内面と時代との葛藤が、東学を評価しながらも否定する大きな矛盾を抱かせたと思われる。そして、このような矛盾は、そのまま作品内部構造に影響し、作品自体をも破綻させるきっかけになったと思われる。

5 むすび

以上、金史良文学に現れた白々教事件の影を白々教事件発覚前後の作品から考察してみた。その結果、白々教事件前に書かれた「山寺吟」「土城廓」に描かれた東学・東学系類似宗教のイメージと、事件以降の「草深し」「太白山脈」「海への歌」に描かれたイメージとの間には大きな違いが認められる。「山寺吟」「土城廓」では、東学・東学系類似宗教が長閑な田園の風景を描写する一つの素材として、または植民地政策を告発する素材として使われており、それ自体への批判はほとんどなされていない。むしろ好感さえ感じられる。こういう好意的な

態度が白々教事件後まもなく書かれた「草深し」になると大きく変化する。白々教事件を境に東学・東学系類似宗教のイメージは急変し、嫌悪と怒りの対象になっていくのである。それをもっとも激しく表現したのが「草深し」であるが、白々教事件をきっかけにして類似宗教への批判と嫌悪は東学・東学系類似宗教全体へ広がり、それ以降の作品に大きくその影を落とすことになる。

「草深し」から約一年半経ってから書かれた「太白山脈」では、東学を描く際に、白々教事件の影が強く現れ、東学と白々教が同様の宗教として扱われている。そのためか、東学を描くところには、時代背景の錯誤や、東学の性格に対する間違った見解がしばしば見られる。しかし、作品の終わり近くになって、東学への好意的な評価も加わるが、これはかえって作品全体の不統一をもたらす結果になってしまう。一方、「海への歌」での東学のイメージは、基本的に「太白山脈」の終わり近くでなされた変化した東学のイメージを継ぐもので、そこには以前のような白々教の影は全く見受けられなく、東学の歴史的な意味が新たに模索された。しかし、そのような新たな試みは、戦争末期の国策の論理によって大きく歪められ、評価しながらも否定する矛盾を露呈させ、その結果、作品自体も破綻してしまう。

注

(1) 安宇植『評伝金史良』（草風館、一九八三年）の本文と「金史良年譜」、また『金史良全集四』（河出書房新社、一九七三年）の「金史良年譜」による。

(2) 「草深し」の解題（任展憲、『金史良全集一』）。

(3) 保高德蔵「日本で活躍した二人の作家」（『民主朝鮮』四号、一九四六年七月）によると、「総督府の官憲に阿諛する作家を揶揄した「天馬」や、色衣政策を諷刺した「草深し」などの痛烈な作品を発表して、朝鮮総督府出張所のブラック・リストにあげられ」たという。

(4) 一九〇七年発令の保安法、一九一〇年八月警務総監部令「集会取締二閱スル件」により、「天道教、侍天教、普天教など七〇近くにのぼるいわゆる類似宗教、新興宗教は公認の宗教とされず、宗教類似団体の結社として」厳重に取り締まられたという（韓晰曦『日本の朝鮮支配と宗教政策』未來社、一九八八年）。本稿での類似宗教の意味はこれらの定義によるものである。なお、飯山教系列の類似宗教も一般的に使う場合には東学系類似宗教として扱い、区別の必要がある時には卍多系類似宗教として表記した。

- (5) 「火田地帯を行く」(『金史良全集四』に所収。)
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 安宇植『評伝金史良』(草風館、一九八三年)の「金史良年譜」による。
- (8) 裁判は、釜屋裁判長の主審、播本・和氣、兩陪席判事と杉本検事の立会のもとで開かれた。『朝光』(一九四〇年五月号)には、「白々教事件公判傍聴記」(蔡廷根)と杉本検事の「白々教事件論告文」が載せてある。「草深し」の白々教に関する内容は、この論告文によるものである。
- (9) 以下、白々教事件に関する内容は、『大阪毎日新聞』、『東京朝日新聞』、『毎日新報』、『邪教白々教の正体』(金大観『朝光』一九三七年六月)、『白々教事件論告文』(『朝光』一九四〇年五月)、『朝鮮の類似宗教』(村山智順、朝鮮総督府編、国書刊行会、一九七二年)、『朝鮮の占トと予言』(村山智順、朝鮮総督府編、国書刊行会、一九七二年)などによるものである。
- (10) 村山智順『朝鮮の類似宗教』(朝鮮総督府編、国書刊行会、一九七二年)
- (11) 注(10)に同じ。
- (12) 朝鮮時代の予言書。『鄭鑑録』では、李氏朝鮮が終わり、鄭氏によって新しい王朝が起こることが予言され、その王朝の首府になるのが鷄龍山の麓の新都内であるという。その新しい王朝を起こす予言者が鄭道令である。
- (13) 忠清南道中央部の山。標高八二八メートル。『鄭鑑録』予言の中心的な山で、土俗的な民間信仰団体がその麓の新都内に集中していた。
- (14) 「白々教事件論告文」(『朝光』一九四〇年五月、朝鮮語)。
- (15) 朝鮮総督府学務局社会課『色服と断髪』(社会教化資料第二輯、一九三三年)
- (16) 「草深し」本文の中の注(『金史良全集一』)
- (17) 注(7)に同じ。
- (18) 「山谷の手帳」(『東亜日報』、一九三五年四月二日から二八日まで、全六回、朝鮮語)。
- (19) 金時明「農民精神培養に注力」江原道洪川農民訓練所」(『朝鮮』、一九三六年四月)
- (20) 金時明「洪川農民訓練―授与式における所長訓話」(『同胞愛』、一九三七年三月)。
- (21) 注(19)に同じ。
- (22) 『独立運動史』(第八卷、文化闘争史、独立運動史編纂委員会、一九八〇年、ソウル、朝鮮語)

- (23) 白川豊「佐賀高等学校時代の金史良」(『朝鮮学報』第一四七輯、一九九三年四月)
- (24) 注(23)に同じ。
- (25) 『毎日新報』(一九三七年四月十四日)
- (26) 呉知泳・梶村秀樹訳注『東学史―朝鮮民衆運動の記録』(東洋文庫、一九七〇年)
- (27) 注(18)に同じ。(一九三五年四月二六日付、朝鮮語)
- (28) 注(14)に同じ。
- (29) 注(14)に同じ。
- (30) 村山智順『朝鮮の占トと予言』(朝鮮総督府編、国書刊行会、一九七二年)
- (31) 『毎日新報』(一九三七年四月十三日付、白々教事件号外)
- (32) 金大観「邪教白々教の正体」(『朝光』、一九三七年六月、朝鮮語)
- (33) 注(14)に同じ。
- (34) 注(2)に同じ。
- (35) 注(23)に同じ。
- (36) 「山寺吟」(『朝鮮日報』、一九三四年八月七日付、朝鮮語)
- (37) 「天使」の解題(金達寿、『金史良全集二』)
- (38) 「土城廊」は一九三六年『堤防』二号に最初発表され、後に『文芸首都』一九四〇年二月に改作発表され、更に第一創作集『光の中に』、理論社刊『金史良作品集』、『金史良全集』(河出書房新社)に収録されたが、いずれの作品集も『文芸首都』所収の「土城廊」を底本にしている。そのため、『堤防』所収の「土城廊」は入手困難のため、その全体は確認していないが、その構成の異同は任展慧の紹介によって(『金史良全集一』の「土城廊」の解題。氏はその異同を三箇所取り上げている。)窺い知ることができる。また、ソウルで出版されたキム・ゼナム『金史良作品集 従軍記』(サルリムト、一九九二年)には、北朝鮮の文芸出版社から刊行した『金史良作品集』の中の「土城廊」が転載されており、その中には任展慧によって指摘された三箇所も入っているが、その位置が任展慧が指摘したところとは違ふところに入っていて、この「土城廊」が何を底本にして訳されたか全く窺い知ることができない。韓国で出版されている「土城廊」はほとんどこの北朝鮮版の「土城廊」をそのまま転載しているが、おもに改作されたところは、任展慧が考察したように、「日本人の存在を描いた箇所が、改削されもしくは欠落したことで、それ以外の異同はほとんどない。とくに本稿で扱う上帝教に関する記述は、検閲に関わる素材でもないことから、『堤防』と『文芸首都』

での異同はあまりなかったと思われる。

一方、佐賀高等二年次に書いた「土城廊」と『堤防』所収の「土城廊」との異同は、草稿が見つからない現在では確認しようがないが、沢開進の記憶によると（「金史良の学生時代」、『図書』、一九七二年四月号）、『堤防』に「土城廊」を出す前に、金史良からその草稿の校正を頼まれたが、「日本語として、おかしいところがあった」ので、「このまま出し給え」と進めたという。また、白川豊も「内容上はこの初出が佐高二学年時の草稿とほぼ同一」のものとして考察している（注（23）に同じ）

（39）磯貝治良「始源の光―金史良論」（『始源の光、在日朝鮮人文学論』創樹社、一九七九年）

（40）注（10）に同じ。

（41）注（14）に同じ。

（42）東学に関する内容は、注（26）の呉知泳著・梶村秀樹訳注『東学史―朝鮮民衆運動の記録』（東洋文庫、一九七〇年）を参考にした。

（43）林鐘国・大村益夫訳『親日文学論』（高麗書林、一九七六年）

（44）兪鎮午「主題から見た朝鮮の国民文学」（『朝鮮』、一九四二年十月）

（45）注（43）に同じ。

（46）金允植『韓日文学の関連様相』（一志社、一九七四年、ソウル）